

凡例

以下に、黒田清輝、杉竹二郎宛山本芳翠書簡を翻刻する。翻刻および解題は椎野晃史（福井県立美術館学芸員）が担当した。翻刻にあたっては以下の点を配慮した。

一、書簡はすべて東京文化財研究所所蔵である。
二、本分の行取り、文字は原則原文どおりとし、影印版と照合できるように配慮した。

三、文中には適宜、読点（、）を加えた。

四、誤字・宛字・衍字がある場合も、原文のままとした。

五、判読不能の文字は、その字数を計って□を挿入した。

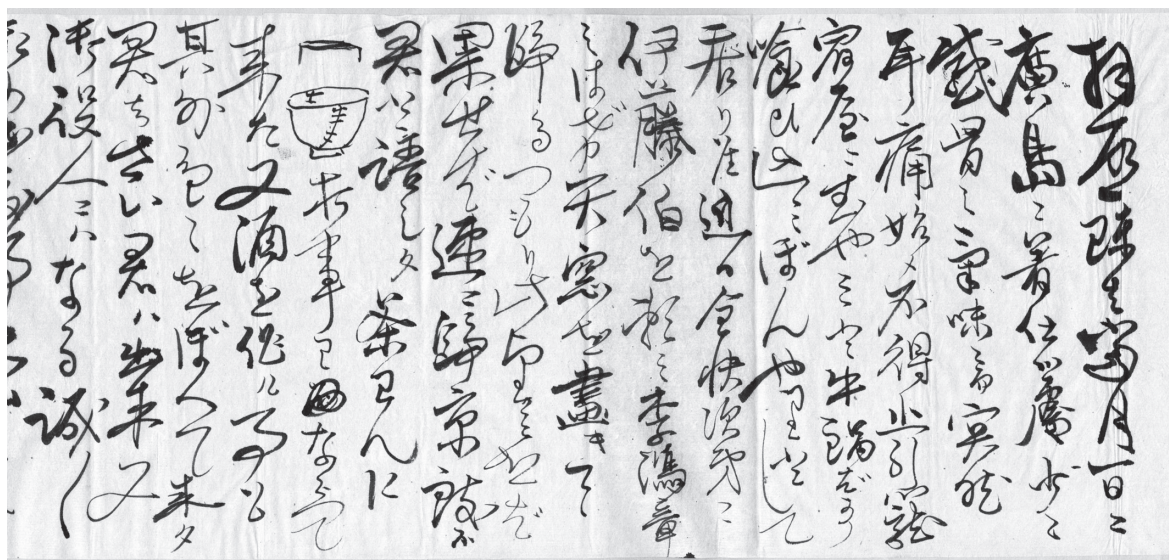
六、踊り字は、平仮名は、で、片仮名は、で、漢字は々で、複数字の繰り返しの際にはくで示した。

七、抹消・訂正の文字がある場合、文字が判明するものについては本文にその文字を記し、左傍に々を付した。

八、書簡の紙継ぎ部は影印版の下縁に△をもって示した。

（謝辞）書簡の翻刻にあたりましては、田中潤氏（学習院大学非常勤講師）、戸田浩之氏（福井県立美術館主任学芸員）にご教示賜りました。ここに記してお礼申し上げます。

黒田清輝宛、杉竹二郎宛 山本芳翠書簡 影印・翻刻・解題



拝啓、陳は當月一日二
廣島ニ着仕候處、少々
感冒之氣味ニ而突然
耳痛始メ、不得止引籠
宿屋ニむやミと牛鍋ばかり
喰ひ込ミぼんやりとして
居り候、近日全快次第ニ
伊藤伯を頼ミ李鴻章
之はげ天窓を畫きて
歸るつもり、此望ミをば
果せば速ニ歸京致候、
君と語シタ茶わんに
（絵）打事わ□ならべて
△
来た、又酒を作ル事も
其外色々をばへて来タ、
君はさい君ハ出来又
御役人ニハなる、誠く

1. 黒田清輝宛山本芳翠書簡（明治二十八年四月五日）

廣島水主町（現広島市中区加古町）から京都に滞在している黒田宛に送った書簡。文中でも触れられているように芳翠は京都の黒田の住所を知らない為、一度東京の知り合いに送ってから転送してもらっている。書簡の主旨は、日清戦争の従軍から帰国した直後の報告で、日常的な報告に加え、黒田の結婚や、第四回内国勸業博覧会の審査員になったことについても触れている。

冒頭では「當月一日二廣島ニ着」とあり、これまで知られてこなかった芳翠の従軍からの帰国日を伝える。広島は日清戦争時において出兵基地として機能し、戦場からの帰国も同地が玄関口となった。その中で水主町は当時の広島県庁が所在した地区で、また日清戦争の大本営が設置された広島城に近い距離に位置する。伊藤博文や山縣有朋を介して明治天皇から内命を受けて従軍したことが知られるが、現在宮内庁三の丸尚蔵館には芳翠の日清戦争を描いた連作「明治二十七八年戦地記録図」（全十五図）が収蔵されている。

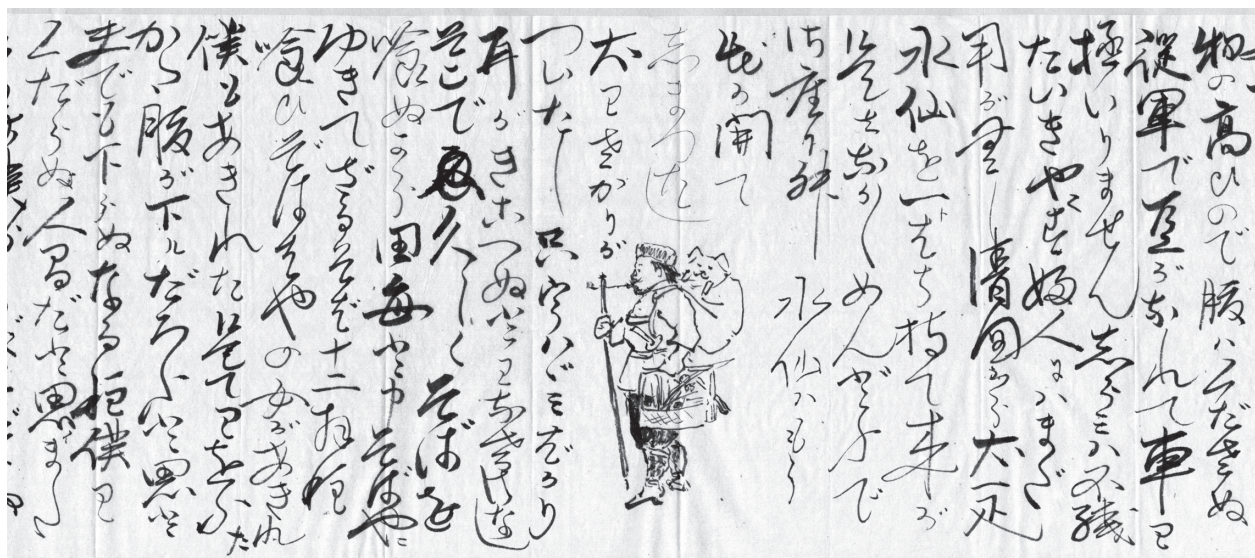
さて従来の研究では『黒田清輝日記』の明治二十八年二月九日の記述をもとに、この頃黒田と共に芳翠も帰国へ向かったと考えられてきたが、後に丹尾安典氏が紹介された「大阪朝日新聞」の記事によって、少なくとも三月のはじめまではその地に残っていたと訂正されている^②。そして冒頭に記されているように四月一日に広島に着いたとするならば、三月下旬頃帰国に向かったと類推できる。

帰国した芳翠は、風邪気味により耳が痛み、宿に籠ることを余儀なくされるが、回復した折には伊藤を頼り、清国全権代表として講和交渉のために来日していた李鴻章を描くことを計画していたようである。同書簡で後述しているように、同年三月二十四日に自由党の壮士小山豊太郎が李鴻章を狙撃したために、計画は破綻しているが、従軍という役目の最後に、調印に訪れた清国の代表を勝利の象徴的な場面として描きたいという芳翠の意図がうかがえよう。なお書簡中に描かれる芳翠自身の挿絵は、芳翠の従軍時の姿を伝え、宮内庁三の丸尚蔵館収蔵の「明治二十七八年戦地記録図」のうち「平壤の捕虜」に登場する芳翠自身の姿と重なる。

御め出度事沢山にて
御うら山敷奉^{こと}存候^候、そこで
只今わ京都二おいで之由
承り候得共、番地しらぬゆへ
東京江此手紙を送ル、若シ
早く君の手二渡りて返事の
来ルの松ばかり、ツ、レツテンチリチン
とゆうようなわけで
僕がね君廣島二着すると
すぐね一句出来タ
うくひすか
それきたのまとい
はつねいれ
字あまりの一句、ところで
耳がわるい者ダからとうとけ
きようぐらいニしかきこへぬ、
其聲を楽ミ二居ルとね
早かゞ出てさす、是は耳の
きこへぬにハ誠にけつこく、
かやの中から梅の花をみる
事ハ僕ハ始めてでげす、
又廣島は人沢山で魚ずくな

△
御め出度事沢山にて
御うら山敷奉^{こと}存候^候、そこで
只今わ京都二おいで之由
承り候得共、番地しらぬゆへ
東京江此手紙を送ル、若シ
早く君の手二渡りて返事の
来ルの松ばかり、ツ、レツテンチリチン
とゆうようなわけで
僕がね君廣島二着すると
すぐね一句出来タ
うくひすか
それきたのまとい
はつねいれ
字あまりの一句、ところで
耳がわるい者ダからとうとけ
きようぐらいニしかきこへぬ、
其聲を楽ミ二居ルとね
早かゞ出てさす、是は耳の
きこへぬにハ誠にけつこく、
かやの中から梅の花をみる
事ハ僕ハ始めてでげす、
又廣島は人沢山で魚ずくな

(1) 長尾一平編『山本芳翠』長尾一平、一九四〇年。
(2) 丹尾安典「芳翠従軍記」『二寸』一三三号、二〇〇三年一月。



物の高ひので腹はくださぬ、
従軍で足がなれて車わ

極いりません、しらミハ不残

たいきやくす、婦人にハまだ

用が無し、清國から犬一疋

水仙を一トはち持て来が

是はなか／＼めんどふで

御座リ舛、水仙ハもう

花が開て

しまつたし、(絵)

犬わさかりが

ついたし、只うはゞミばかり

耳がきこへぬとわなさけなし、

そこで又久しくそばを

喰わぬから田毎と申そばや二

ゆきてざるそば十二拝程

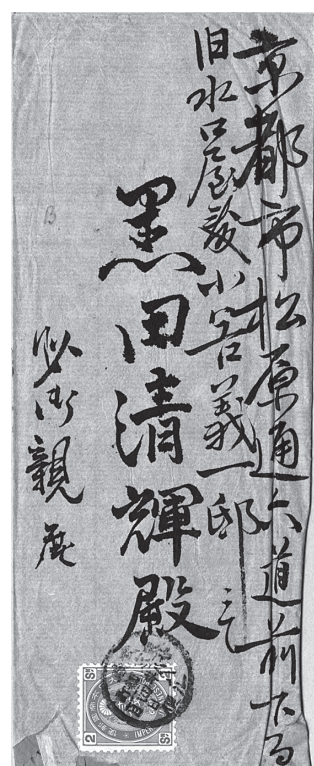
喰ひそばはやの女があきれた、

僕もあきれた、是てわをおふ

かた腹が下ルだろふと思と

夫でも下らぬ、なる程僕わ

封筒(縦一八・六cm、横七・五cm)
(表)



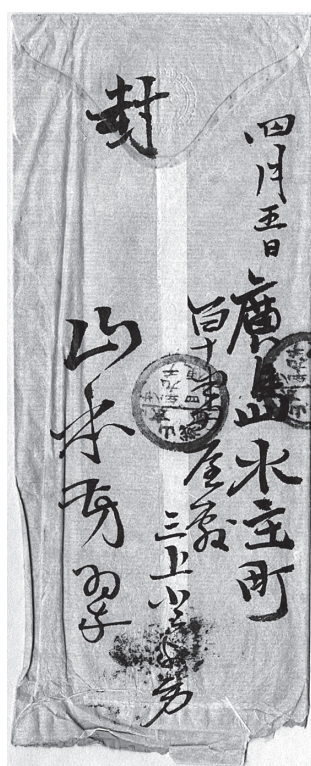
京都市松原通六道前下る
旧水口屋敷小谷義一郎にて

黒田清輝殿

必御親展

(消印) 廿八年四月八日ル便

(裏)



四月五日 廣島水主町

百十番屋敷

封 三上とよ方

山本芳翠

(消印) 山城京都廿八年四月九日チ便

乍併僕がまだくだぬ
馬鹿八郎が有て、李鴻章
ピストルなんぞとわ誠に
驚入たる事で、夫が
為に僕の目算大違ひ、
併シ是は日本全國之人の
目算違ひだからしかたがなひ、
又是は人のはげ天窓^{あたま}をせんきに
やむと申かもしれぬが、
君の御婦人と始メテノ旅なれば
あまり樂をかさねて
首之ほねがやわからに
ならぬように此段一しほ御
頼申シやす、猶いきをひお
つけるつもりで喰すきと
是も直いけません、いくら
馬鹿の事を書てもしまいにハ
なりませんからまず今日ハ
此處二而さようならく、
頓首、
四月五日
山本芳翠
拜
黒田老兄
閣下

乍併僕がまだくだぬ

馬鹿八郎が有て、李鴻章

ピストルなんぞとわ誠に

驚入たる事で、夫が

為に僕の目算大違ひ、

併シ是は日本全國之人の

目算違ひだからしかたがなひ、

又是は人のはげ天窓^{あたま}をせんきに

やむと申かもしれぬが、

君の御婦人と始メテノ旅なれば

あまり樂をかさねて

首之ほねがやわからに

ならぬように此段一しほ御

頼申シやす、猶いきをひお

つけるつもりで喰すきと

是も直いけません、いくら

馬鹿の事を書てもしまいにハ

なりませんからまず今日ハ

此處二而さようならく、

頓首、

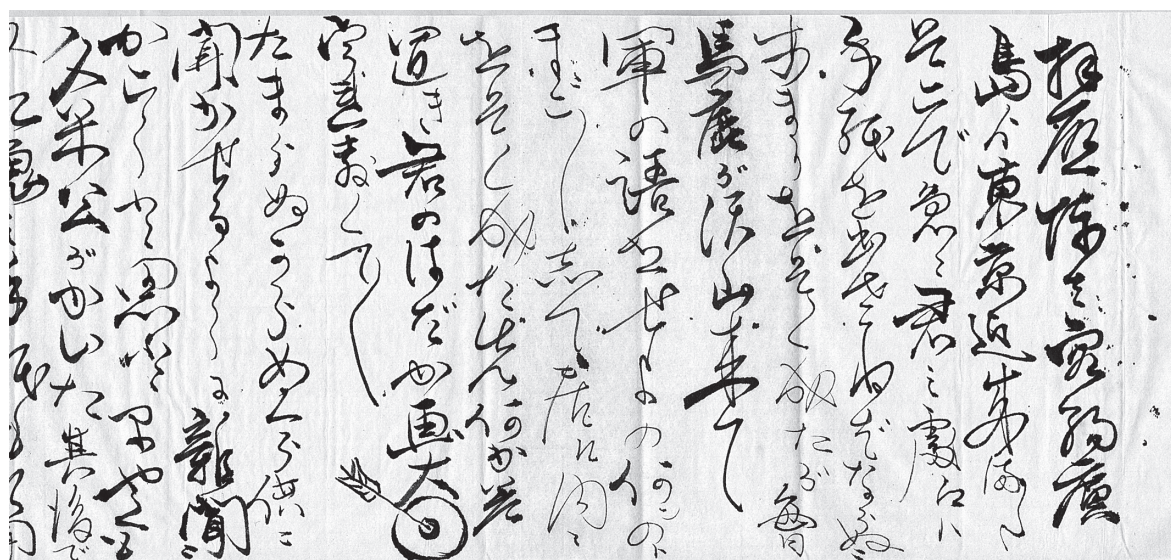
四月五日

山本芳翠
拜

黒田老兄
閣下

明治二十八年五月三日、九日付書簡（〇八一〇三六）※二通同封

（縦一八・〇cm、横一〇〇・〇cm）



拝啓、陳は容約廣

島方東京迄来、また

そこで急二君之處江ハ

手紙を出さねばならぬ二

あまりをそく成たが、毎日

馬鹿が沢山来て

軍の語をせよの何んのト

まごくして居ル内ニ

をそく成た、先何か差

置き君のはだか画大（絵アタリ）、

うれ敷くてく

たまらぬからめくら供ニ

聞かせるように新聞ニ

かこうと思ふニ、早やくも

久米公がかいた其後で

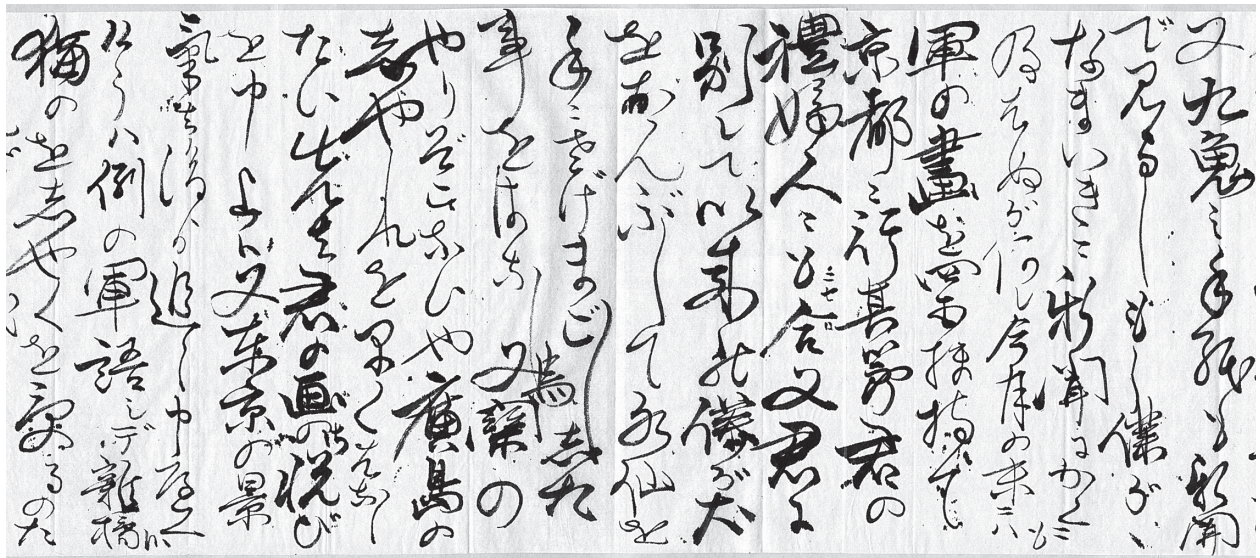
2—1. 黒田清輝宛山本芳翠書簡（明治二十八年五月三日）

五月三日付および九日付の便箋は一つの封筒に同封されている。封筒表に宛名はなく、代わりに黒田の住所を無くしたため、送れなかった旨が記されている。それぞれ別に解説を付すこととする。まず三日付の書簡は、広島から帰京した時期を伝え、また裸体画論争の火種となった「朝妝」について、芳翠の所感を伝えている点が重要である。

前便からおよそ一ヶ月後の手紙であり、冒頭では広島から帰京した事が伝えられているが、本書簡が五月三日付に書かれていることから、四月末には帰京していたことが推察される。帰京したばかりの芳翠のもとには従軍話を聞くために連日のように来客が押し寄せ、黒田への連絡が遅くなったと記している。

さて本書簡では「君のはだか画大（絵アタリ）」とあるが、これは京都で開催された第四回内国勸業博覧会に出品された「朝妝」（焼失）の事を指す。芳翠は裸体画の重要性を理解しない、あるいは排斥しようとする者に対して、新聞紙面に記事の寄稿を思い立ったものの、既に久米桂一郎や九鬼隆一らが先んじて新聞に裸体画を支持する文書を寄せたことから、芳翠自身は記事を書くことはなかったという。久米は「裸体は美術の基礎」という文章を新聞に掲載し⁽¹⁾、また「九鬼之手紙」とは四月二十七日付の小倉警視總監に宛てられた書簡であり、五月二日の『東京朝日新聞』に掲載されている⁽²⁾。

次に五月末に軍の画を四、五枚京都に持参する旨が記されている。これは直前に従軍した日清戦争の画と考えられるが、五月十四日付の書簡では天皇陛下に献上する画と記している。加えて六月十四日付の『読売新聞』の記事では「油画家にて有名の山本芳翠氏ハ先頃日清戦争の實況を目撃して歸朝せしが目下宮内省の内命を受けて右戦争の實況を大油繪三十余枚に揮毫中なりと聞く⁽³⁾」とあり、あるいは長尾一平の回想「従軍から歸つて、生巧館で只今「御物」に成つて居る處の二十枚の戦争畫を描き初めた⁽⁴⁾」と併せて考えるならば、現在宮内庁三の丸尚蔵館に所蔵される「明治二十七八年戦地記録図」が該当する可能性が高い。そして明治天皇が当時、京都御所に滞在していることから、芳翠は京都へ直接作品を持参する計画を立てている。



又九鬼之手紙も新聞

で見るし、もし僕が

なまいきニ新聞にかくニも

及はぬが、何レ今月の末ニハ

軍の畫を四五枚持て

京都ニ行、其節君の

禮婦人ニも合又君に

別レて以来の僕が犬

をおんぶして水仙を

手ニさげまごゝした

事をはなし、又馬關の

やりぞこなひや廣島の

しやれを早くはなし

たい、先は君の画の御悦び

を申上候、又東京の景

氣は後方追々申へく候、

けうハ例の軍語シデ新橋

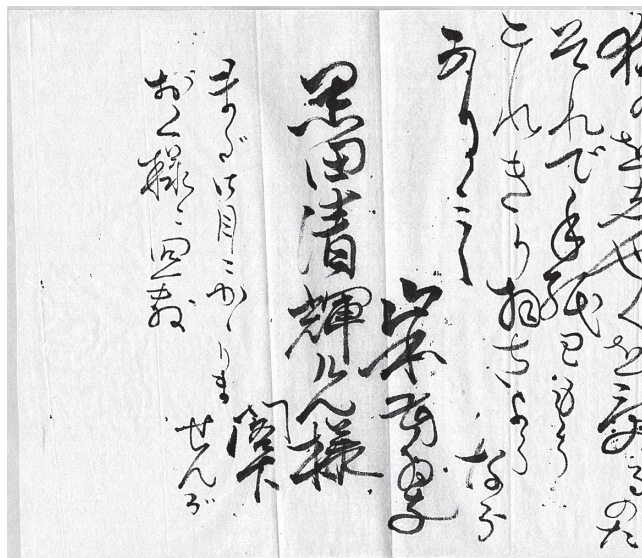
猫のをしやくを受るのた、

(1) 久米桂一郎「裸体は美術の基礎」『国民新聞』一八九五年四月二十八日、五月一日、『毎日新聞』一八九五年四月二十八日、三十日。

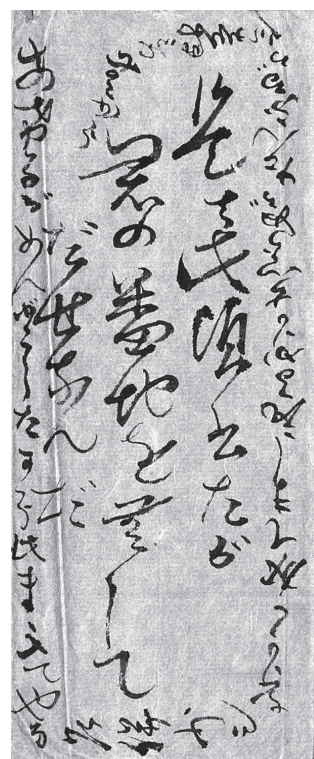
(2) 「小倉警視總監監宛九鬼隆一書簡」『東京朝日新聞』一八九五年五月二日。

(3) 「読売新聞」一八九五年六月十四日。

(4) 長尾一平編『山本芳翠』長尾一平、一九四〇年。

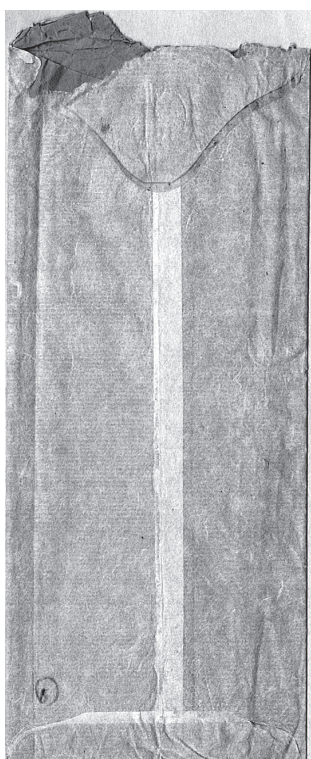


それで手紙わもう
これきり、拝さようなら、
五月三日
山本芳翠
黒田清輝兄様
閣下
まだ御目二かゝりませんが、
おく様二宜敷、



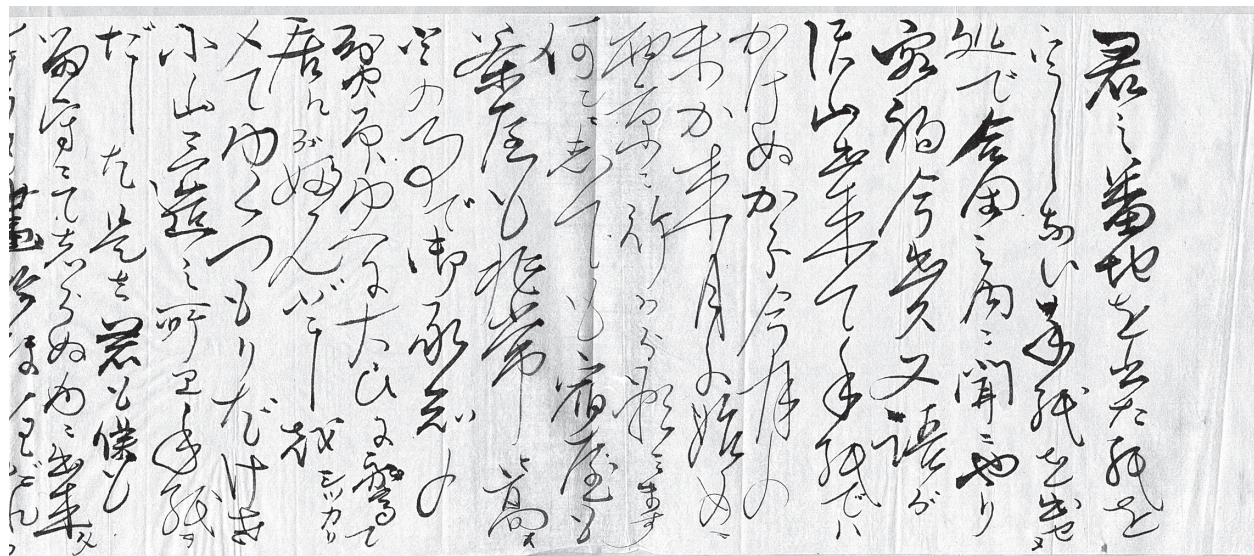
封筒（縦一八・八cm、横七・五cm）
（表）

是は此頃書たが
君の番地を無して
だせなんだ、
あけるがめんどろたから此まゝ、入てやる、
乍併少シを
もく成てまし取るかもしらぬが、たんふるが
今壺枚しか無から、



（裏）

（封筒裏面・墨付きナシ）



君之番地を書いた紙を

うしない手紙を出せヌ

処で合田之内二聞ニやり

容約今出ス、又語が

沢山出来て手紙でハ

かけぬから今月の

末か来月の始めニ

西京二行から頼ミます、

何ンニしても宿屋も

茶屋も非常ニ高イ

との事で、御承知の

貧印ゆへに大ひに驚て

居ルがふんどしをシツカリ

メてゆくつもりだけさ、

小山三造之所エ手紙ヲ

だした、是は君も僕も

留守ニてしらぬ内ニ出来タ

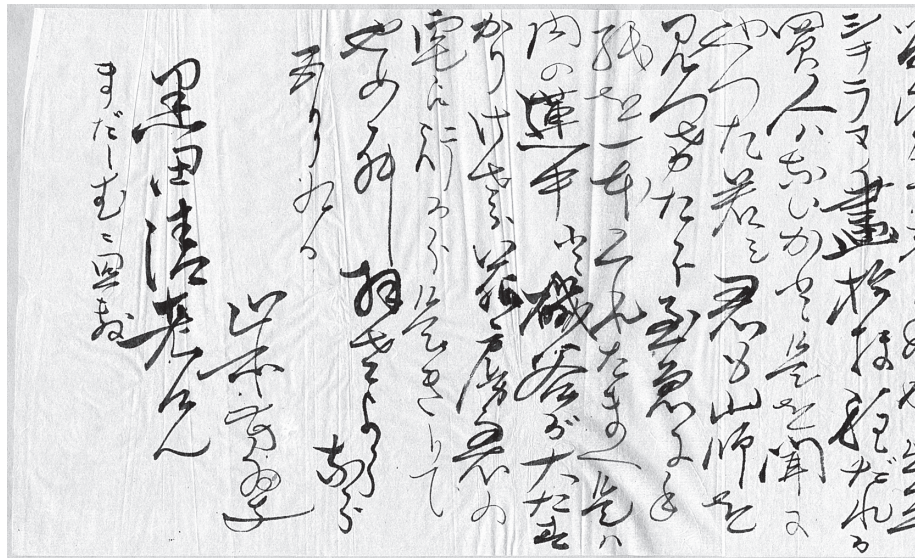
212. 黒田清輝宛山本芳翠書簡(明治二十八年五月九日)

本書簡は五月三日付の書簡と同封された便箋で、黒田の住所を失った芳翠は合田清より住所を聞き出してようやく投函したという。宛名が書かれた封筒は現存しない。

芳翠は五月三日付の書簡に続いて五月末あるいは六月のはじめに京都へ行く計画を記している。また小山三造に手紙を出し、黒田や芳翠が不在の間に制作されたジオラマ画十枚程度の買い手を探している。後便の書簡でジオラマ画の制作者として和田(英作か)、北蓮藏、白瀧幾之助の名前があがっているように、芳翠の下で学んでいた若い洋画家たちが、芳翠の不在時に制作したジオラマ画である。芳翠は明治二十二(一八八九)年に浅草公園花屋敷の隣にジオラマ館を開設して観覧に供しているが、この時に油画三面(「憲法発布式の図」、「桜田門外要撃の図」、「愛宕山上浪士結束の図」)が展示され、それは高さ、幅がそれぞれ七尺ほどあったことが伝えられている⁽¹⁾。表面には真綿を散らして雲に見せるなど、油絵と実物を接合させて、リアリティーを追求する試みであったようで、弟子も芳翠の下でジオラマ制作に触れ、自身でも制作していたことが知られる。小山は明治九(一八七六)年に国沢新九郎の彰技堂に入門し洋画を学び、明治十二年に京都へ移り、京都府画学校の教員として洋画を教えた人物である。芳翠は黒田にも同様に売却先を打診しており、文中で「内の蓮中と磯谷が大たすかり」と記しているように、売却が急務であった様子がうかがえると同時に、弟子のために奔走する師・芳翠の姿が見受けられる。

文末には明治美術会の会頭・花房義質宅を訪問する旨が記されている。芳翠は三日後の明治美術会の大会で従軍体験について講演していることから、その相談であった可能性も考えられる。

(1) 石井研堂『明治事物起源』橋南堂、一九〇八年一月。



シヲラマ畫拾枚程だれか
買人ハないかと是を聞に
△ やつた、若シ君も山師を
見つけたら至急に手

紙を一本くれたまへ、是ハ

内の蓮中と磯谷が大たす

かり、けさ花房君の

宅江行からはきりて

やめ舛、拝さようなら、

五月九日

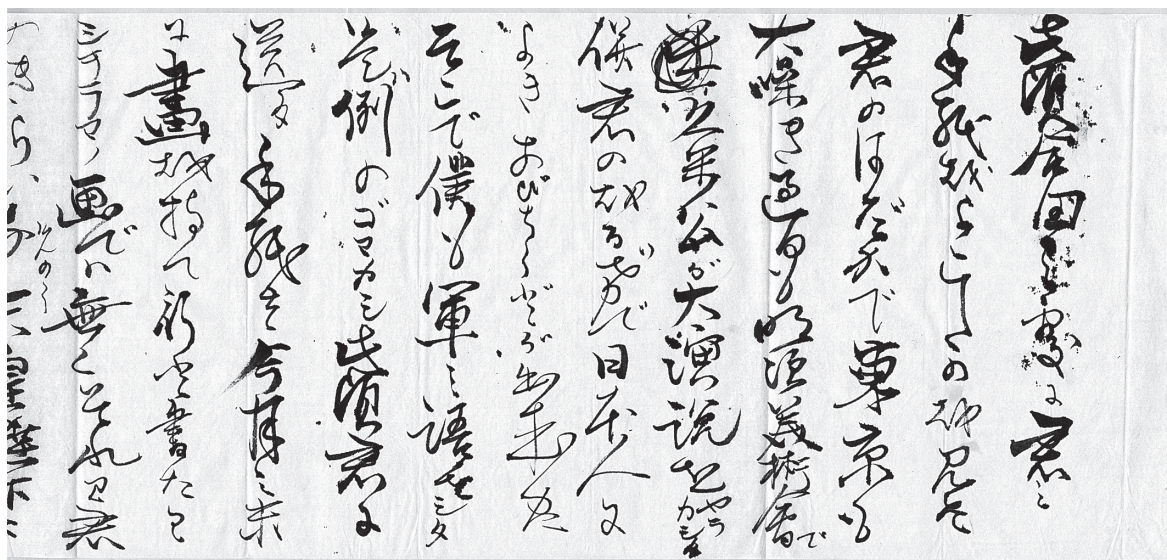
山本芳翠

黒田清老兄

まだ一む二宜敷、

明治二十八年五月十四日付書簡(〇八一〇三三)

(縦一八・〇cm、横一一・五cm)



此頃合田之處に君之

手紙をよこしたのを見た、

君のはだかで東京も

大噪き、過日も明治美術會で

米久米公が大演説をヤラカシタ、

併君のをかげで日本人に

よきあびちうどが出来た、

そこで僕も軍之語をシタ、

是ハ例のゴマカシ、此頃君に

送タ手紙は今月之末

に畫を持て行と書たわ

シヲラマノ画でハ無くそれわ君

3. 黒田清輝宛山本芳翠書簡(明治二十八年五月十四日)

本書簡では黒田の「朝妝」やジオラマ画など、前便と重複あるいは補完する内容が見られ、裸体画騒動に対する芳翠の見解を伝えている点において注目される。

「過日も明治美術會で米久米公が大演説をヤラカシタ」とあるが、これは五月十二日の明治美術會の大会において久米が講演した「裸体美人に関する美術上の意見」のことを指し、文中でも触れられているように、久米の演説に続いて芳翠も従軍経験⁽¹⁾を講じている。

注目すべきはその後続く「君のをかげで日本人によきあびちうどが出来た」の一文である。「あびちうど」はフランス語の「habitude」であり、直訳で「習慣」などの意味を持つ。要するに日本に裸体画の習慣(先例)を持ち込んだ、あるいは裸体画を巡る環境に一石を投じたことを評価していると考えられる。この発言からは芳翠が日本における裸体画の登場を肯定的に捉えていることがうかがえる。

また前便に続き、芳翠はジオラマ画の売却先を探している。芳翠が従軍している間に弟子の北蓮蔵や、白瀧幾之助等(「君の和田」≡和田英作か)が十枚ほど描いたという。これを売却するために芳翠は京都にいる黒田や小山三造に購入希望者あるいは仲介者の有無を尋ねている。続けてジオラマ画について「高橋のわ見ないが」と書いてあるが、これは同年四月二日より京都円山公園で行われた高橋勝蔵の日清戦争を題材としたジオラマ画の展示を指すと考えられる⁽²⁾。

前便の手紙で記されていた関西行については、「天主様」すなわち明治天皇の予定次第で、六月半ばまで遅れる可能性があることを記している。そして末尾には「例のコマカシ画を書ネバ成ぬ」とあるが、先の明治美術會の従軍話を「コマカシ」と言っていることから、日清戦争の画を指すものと考えられる。

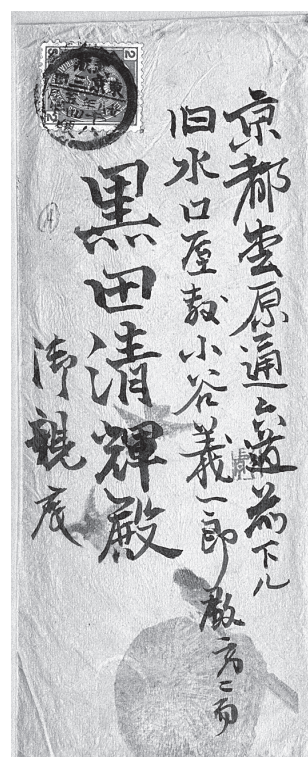
(1) 『読売新聞』一八九五年五月十五日。

(2) 『日出新聞』一八九五年四月二日。

のきらいな天皇陛下に
 差上るのだ、シヲラマハ僕が留守
 之内二君の和田や蓮藏
 白瀧之連中がかひて十枚ハ
 出て居るのだ、夫で若シ君に
 山師が見付かつたら知ラセテ
 くれろと頼ノンダ、高橋のわ
 見ないが夫方ハ若ひかもしれぬ、
 大物拾枚で千両二買いてが有
 は貳百円ぐらひハ世和をした
 やつ二遣るつもりだ、慾の深ひ
 山師が有りそうな物だ、夫で
 又僕は天主様が東京江
 御帰りニ成レバ来月半ば

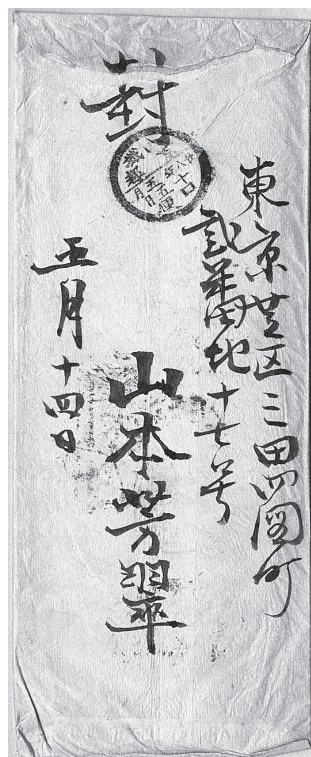
のきらいな天皇陛下に
 差上るのだ、シヲラマハ僕が留守
 之内二君の和田や蓮藏
 白瀧之連中がかひて十枚ハ
 出て居るのだ、夫で若シ君に
 山師が見付かつたら知ラセテ
 くれろと頼ノンダ、高橋のわ
 見ないが夫方ハ若ひかもしれぬ、
 大物拾枚で千両二買いてが有
 は貳百円ぐらひハ世和をした
 やつ二遣るつもりだ、慾の深ひ
 山師が有りそうな物だ、夫で
 又僕は天主様が東京江
 御帰りニ成レバ来月半ば

封筒（縦一八・九cm、横七・一cm）
 （表）

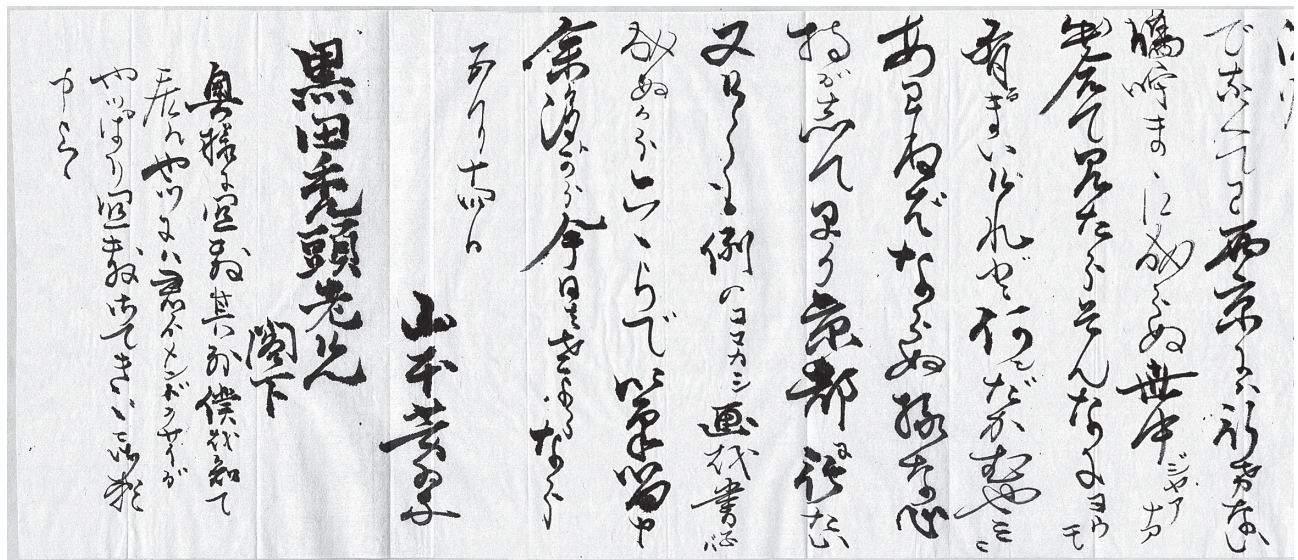


京都松原通六道前下ル
 旧水口屋敷小谷義一郎殿方ニ而
 黒田清輝殿
 御親展
 （消印） 武蔵東京三田廿八年五月十四日八便

（裏）



東京芝区三田四國町
 式番地十七号
 封
 山本芳翠
 五月十四日
 （消印） 山城京都廿八年五月十五日口便



でなくてわ西京にハ行けない、

嗚呼まゝに成らぬ世中ジャアナア、

出合て見たらそんなにヨウモ

有るまいけれど何ンだかむやミニ

あわねばならぬ様な心

持がして早う京都に行たい、

又日々も例のコマカシ画を書ネバ

成ぬからこゝらで筆留申、

余後トから今日はさようなら、

五月十四日

山本芳翠

黒田禿頭老兄

閣下

奥様に宜敷、其外僕を知て

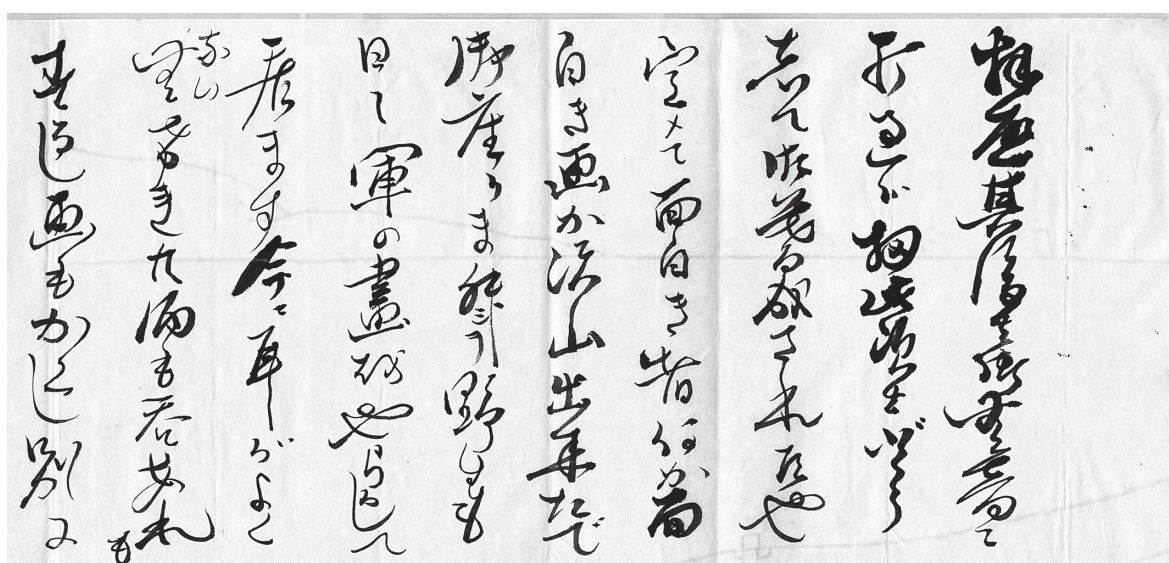
居ルやツにハ君方メンドクサイが

やツぱり宜敷御てきニ御頼

申上候、

明治二十八年六月一日付書簡（〇八一〇三五）

（縦一八・〇cm、横一四八・〇cm）



拝啓、其後は御無音ニ

打過候、扱此頃はどう

して御暮成され候や、

定めて面白き者何か面

白き画か沢山出来たで

御座りま升シヲ、野生も

日々軍の畫をやらかして

居ます、今ハ耳がよく

無けれ共、酒も吞、あれも

△するし、画もかくし、別に

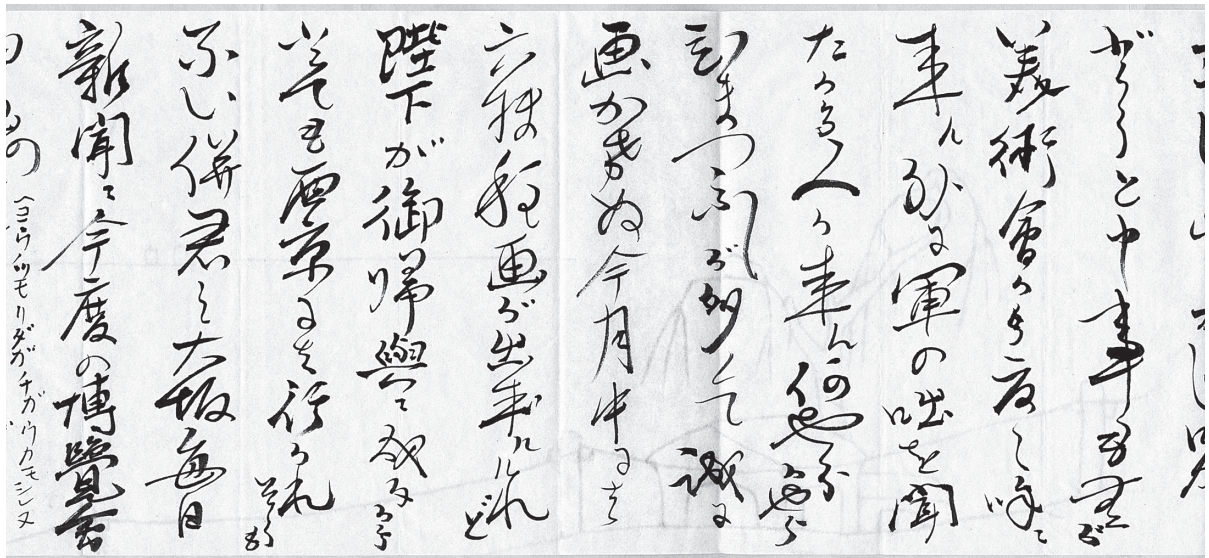
4. 黒田清輝宛山本芳翠書簡（明治二十八年六月一日）

前便からおよそ半月振りに出された書簡。文中では引き続き、軍の画を描き、六枚ほどが六月中に完成予定と記している。また前便、前々便の書簡で触れられていた関西行の計画は、天皇の帰京により断念したようである。

黒田が日本における裸体画の先鞭をつけたことに、芳翠周辺の洋画家たちが喜んだ様子を伝える。また『大阪毎日新聞』の記事を⁽¹⁾読んだことなど、常に京都に居る黒田の動向を気にかけている様子がうかがえる。併せて白瀧幾之助の画が売れたことにも触れている。白瀧は第四回内国勸業博覧会に「待ち遠し」と「景色」を出品しているが、このうち「待ち遠し」が褒状を受け、有栖川宮家の買い上げとなったという。⁽²⁾白瀧はいわば芳翠と黒田の共通の弟子であり、弟子の成功を喜ぶ様子を伝えている。

久米が芳翠のもとを訪れ、アナトミー（解剖学）について講じたという。久米はフランス留学中より人体、裸体を描くためにアナトミーの必要性を強く感じており、アナトミーの授業を積極的に聴講し、自主的な学習に励むなど、日本の留学生のなかでも特に強い関心を持っていたことが知られている。久米は明治二十九年から大正十五年の三十年にわたり、東京美術学校で美術解剖学について講義し、明治三十一年からは森鷗外と『藝用解剖学』を著している。芳翠に対して行った講義の内容は不明であるが、久米が東京美術学校の教壇に立つ前から、アナトミーを講じていたことは注目される。さらに渡欧していた芳翠が年下の久米から講義を受けていること、しかもそれが黒田の裸体画が話題になった直後であることは興味深い。芳翠は裸体画論争によって、改めてアナトミーの重要性を認識、あるいは再認識したことが想像できる。いずれにせよ芳翠は肖像画家として生計を立て、またこの年には裸婦像が多く登場する「浦島図」を発表していることから、自身の制作に有益なアナトミーを学ぶことは必然だったと考えられよう。

文中では「杉君」の来訪を待つ様子が伝えられているが、「杉君」とは後便にも登場する杉竹二郎を指すと考えられる。この頃杉は関西方面に滞在しており、⁽³⁾芳翠はその事を知らずに来訪を待ちわびていたようである。



どうと申事も無が、

美術會から度々呼二

来ル外に、軍の咄を聞

たかる人か来ル、何やらかやら

ひまつぶしが多くて誠に

画かけぬ、今月中には

六枚程画が出来ルけれど、

陛下が御帰與二成タから

とても西京には行かれそうも

ない、併君之大阪毎日

新聞二今度の博覽會へ

本書簡は久米や杉との交流を伝える書簡であり、また年下の久米からアナトミの講義を受けるといった芳翠の柔軟な性格を伝える書簡として興味深い。

(1) 『大阪毎日新聞』の紙面で明治二十八(一八九五)年五月五日より連載された「大博覽會油画漫評」を指すと考えられ、この評を見た芳翠は「実ニかんぷく」と評している。

(2) 『中央美術』第六巻第四号、一九二〇年四月。

(3) 「黒田清輝宛杉竹二郎書簡(明治二十八年五月二十二日)」『黒田清輝フランス語資料集』東京文化財研究所、二〇一〇年三月。

油画の評をいふが實二
 かんぶく、夫二白瀧の画が
 うきん、當人ちやあぬ、其
 吾く二至ル迄大喜び、次二
 君がとうくはだかを出て
 大評伴取たので、是か例二
 なりて画工連中大喜び、
 め出度く、久米君は今日
 朝から来てアナトミノー
 こうぎをしてくれました、
 杉君は此頃僕之處江
 来ルはづたがとふしたか
 待て居ルがまたこない、

「ヨウノツモリダガチガウカモシレヌ
油画の評を見タが実二

かんぶく、夫二白瀧の画が

うれて當人は申不及、其外

吾く二至ル迄大喜び、次二

君がとうくはだかを出て

大評伴取たので、是か例二

なりて画工連中大喜び、

め出度く、久米君は今日

朝から来てアナトミノー

こうぎをしてくれました、

杉君は此頃僕之處江

来ルはづたがとふしたか

待て居ルがまたこない、

黒田清輝宛、杉竹二郎宛 山本芳翠書簡 影印・翻刻・解題

封筒（縦二〇・一 cm、横七・八 cm）
（表）

京都書原通二道前下リ
 旧水口屋敷小谷義一郎方二而
 黒田清輝殿
 敬親展

京都松原通六道前下ル
旧水口屋敷小谷義一郎方二而

黒田清輝殿

御親展

（消印）武蔵東京三田廿八年六月二日二便

（裏）

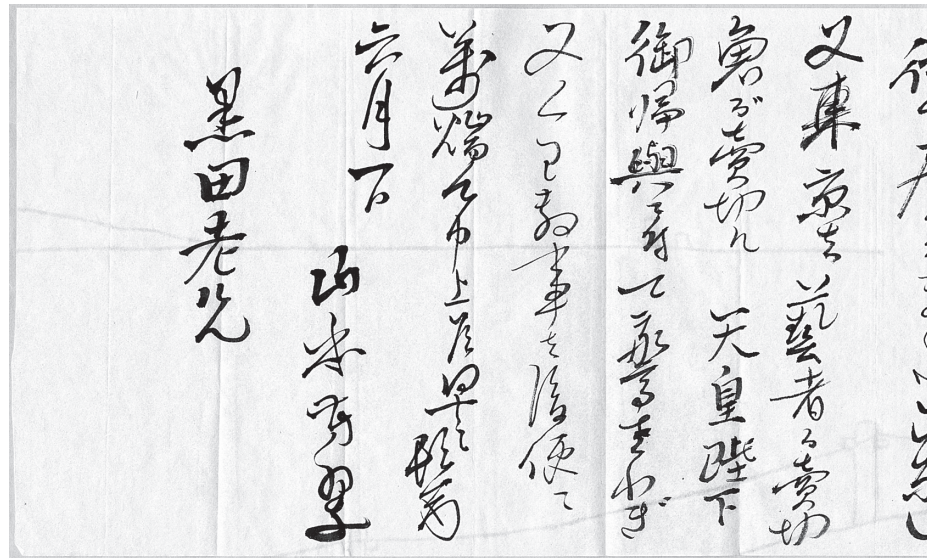
東京芝区三田四國町
 貳番地
 山本芳翠
 封

東京芝区三田四國町
貳番地

封 山本芳翠

六月一日

（消印）山城京都廿八年六月参日リ便



又東京は藝者か賣切

魚が賣切れ、天皇陛下

御帰與二付て驚さわぎ、

又くわ敷事は後便二

萬端可申上候、早々

頓首、

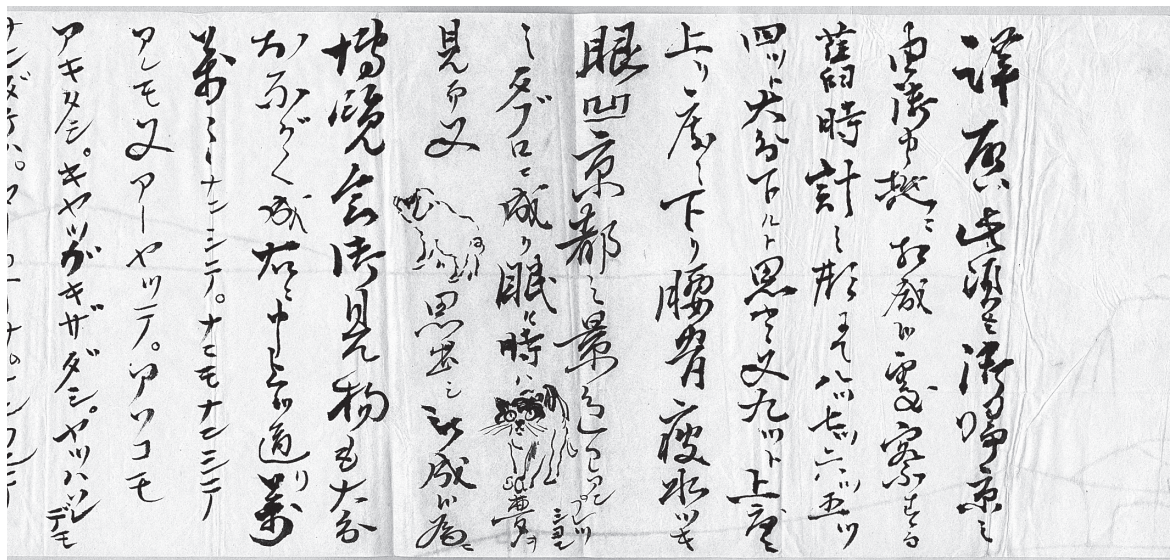
六月一日

山本芳翠

黒田老兄

年欠六月八日付書簡（〇八一〇二六）※封筒なし

（縦一七・九cm、横七七・〇cm）



謹啓、此頃は御帰京之

由御申越二相成候處、察する

舊時計之形にて八ツ七ツ六ツ五ツ

四ツト大分下ルト思と、又九ツト上度ニ

上り、度々下り腰骨疲水ツキ

眼凹、京都之景色わアンプレツシヨン

之タブロニ成り、眠ル時ハ（猫絵）夢ヲ

見而、又（豚絵）思出シ被成候為ニ、

博覧会御見物も大分

おながく成右ニ申上候通り、萬

萬々ナニシテ。ナニモナニシテ

アレモ又アーヤツテ。アソコモ

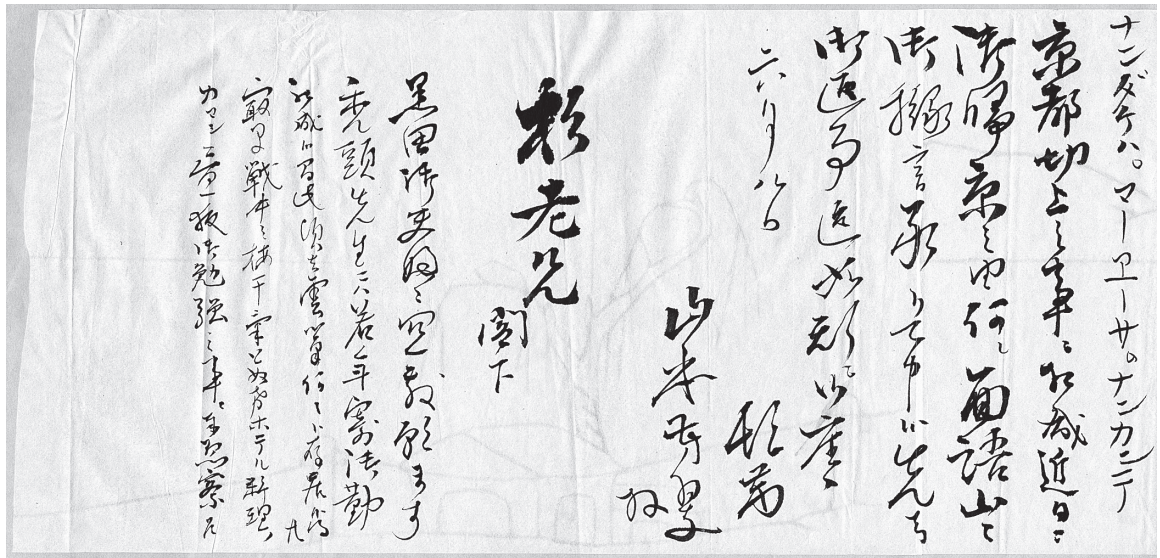
アキタシ。キヤツガキザダシ。ヤツハソレデモ

5. 杉（竹二郎）宛山本芳翠書簡（年欠六月八日）

本書簡は封筒が無く、投函年不詳で宛名も黒田ではなく「杉老兄閣下」と記されている。この杉とは前便と同じく杉竹二郎と思われる。杉は子爵・杉孫七郎の子で、白馬会結成後に研究所においてフランス語の指導を担当し、黒田や久米の書簡や日記にたびたび登場し、親しい仲であったことが知られる。

「京都切上之事二相成、近日ニ御帰京之由何レ面語山々」とあり、博覧会見物の事や書簡末尾に黒田御夫婦に宜しくと書いていることから、明治二十八年に京都滞在中の杉宛に送られた書簡だと考えられる。前便の書簡では杉の行方を知らなかった芳翠だが、本書簡では杉が京都に居ることを知っており、また書簡の冒頭でも「此の頃はご帰京の由御申越しに相成り候」とあることから、前便の後に杉からの書簡があったと考えられる。

文中末尾では黒田のことを禿頭先生と呼んでいるが、「此頃は雲筆何ニト存居候得共」と黒田の制作について案じている芳翠の様子がかがえる。また疲れて眺める京都の景色を「アンプレツシヨン之タブロ」と印象派の絵画に例えている点は興味深い。



ナンダケハ。マーエーサ。ナンカニテ

京都切上之事二相成、近日ニ

御帰京之由何レ面語山々

△
御機言承り可申候、先は

御返事迄如斯ニ御座候、

六月八日 頓首、

山本芳翠

拝

杉老兄

閣下

黒田御夫婦ニ宜敷願ます、

禿頭先生ニハ若年寄御勤

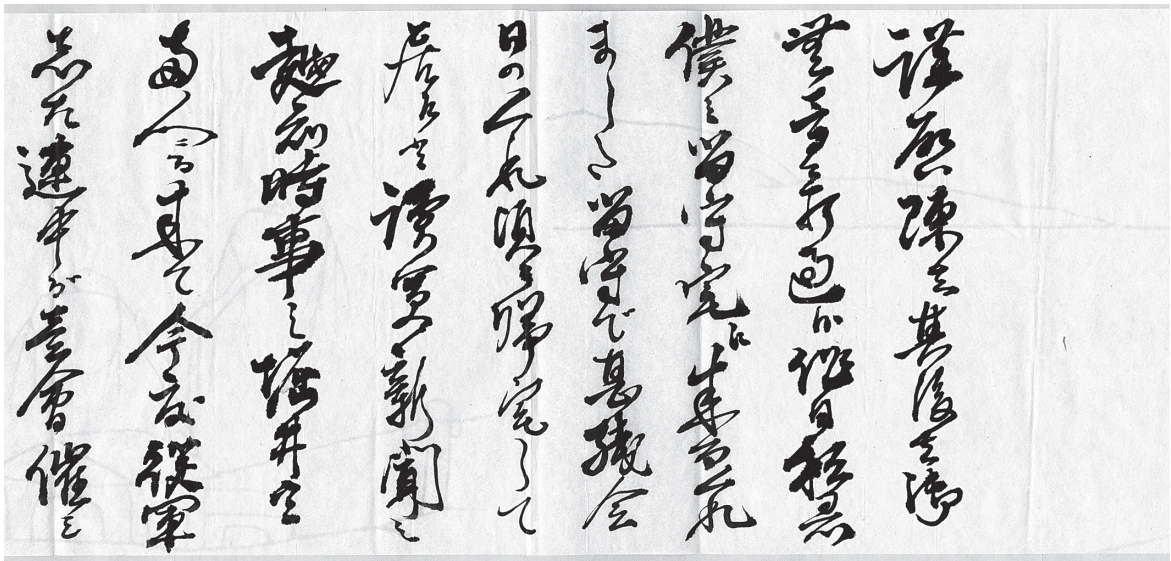
被成候間、此頃は雲筆何ニト存居候得共、

最早戦中之梅干氣もぬけ、ホテル料理ノ

カマン昼夜御勉強之事ニ奉恐察候、

明治二十八年六月十八日付書簡（〇八—〇二五）

（縦一八・〇cm、横一〇四・〇cm）



謹啓、陳は其後は御

無音ニ打過候、昨日杉君

僕之留守宅江来てくれ

ました、留守で甚残念、

日のくれ頃ニ帰宅して

居ルと読買新聞之

越知、時事の堀井と

兩人ニ而来て、今度従軍

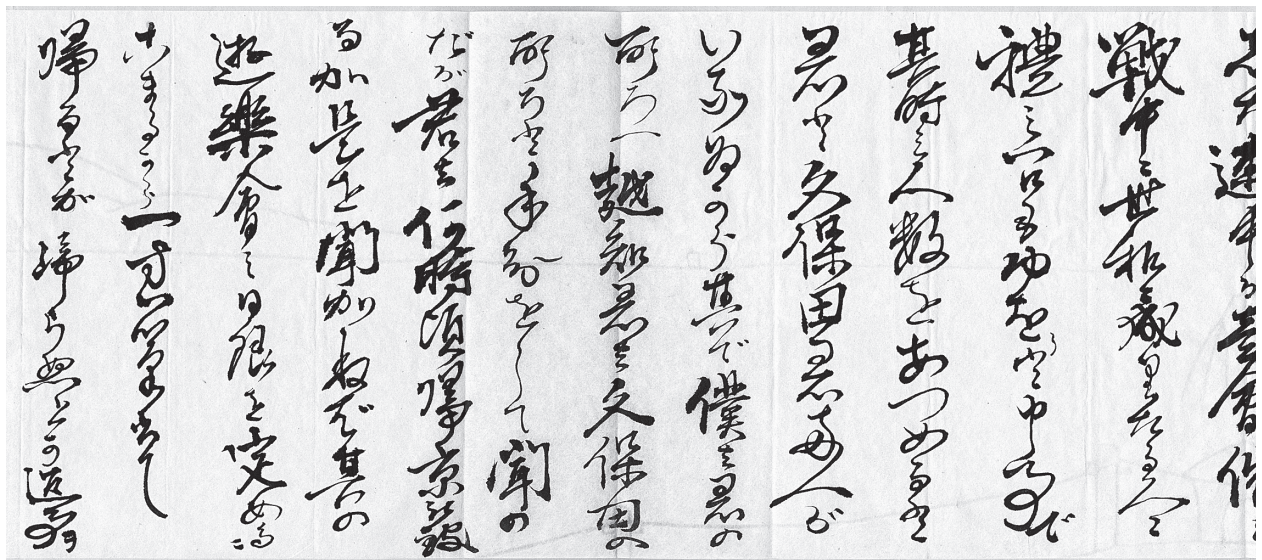
した連中が壺會催シ

6. 黒田清輝宛山本芳翠書簡（明治二十八年六月十八日）

書簡の主旨は日清戦争の従軍でお世話になった人に対してお礼をするための会を開くこと、そしてその会に参加してもらうべく、黒田の帰京予定について尋ねている。

この書簡に登場する「読買新聞之越知」とは日清戦争の時に従軍した『読売新聞』の記者・越智修吉のことで、「時事の堀井」とは同じく『時事新報』の記者として従軍した堀井卯之助を指すと考えられる。二人は『黒田日記』にもたびたび登場し、帰国後も交流が続いていたことが知られる。この二人が芳翠宅を訪問し、遊樂会開催のために従軍で一緒になった人を集める相談したところ、久保田（米僊か）と黒田が不在のため、手分けして兩人の帰京の都合について尋ねることになったという。この遊樂会については、後日談として六月二十八日付の書簡に記載があることから詳細は別記するが、久保田は越智が、黒田は芳翠が連絡をとるという段取りで、芳翠は黒田に対して帰京の有無を尋ねている。

前便で芳翠が杉に対して帰京後の面会を求めていたが、冒頭では杉が来訪したところ芳翠が留守で会うことができなかったことが記されている。



戦中二世和二成りたる人二

禮之一口もゆをうと申事で、

其時之人数をあつめると

君と久保田君兩人が

いなるから、其で僕は君の

所へ、越知君は久保田の

所と手分をして聞の

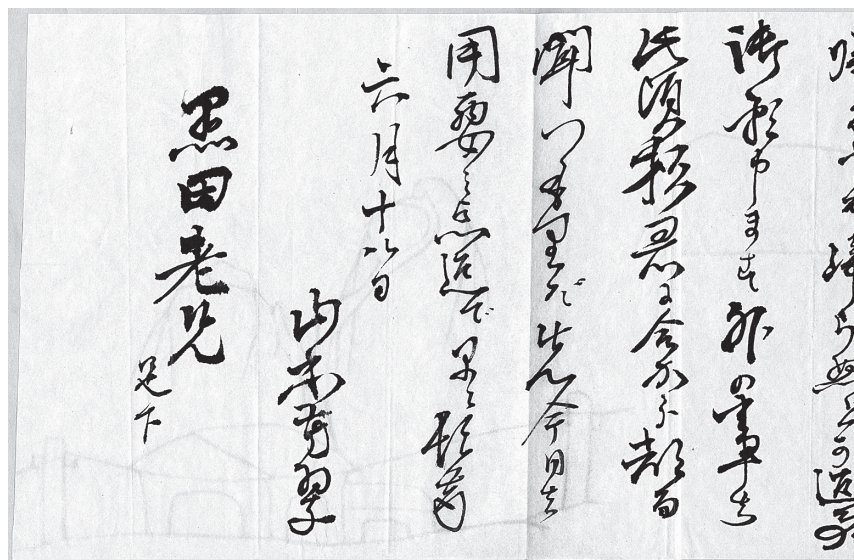
だが、君は何時頃帰京被致

るか是を聞かねば其の

遊樂會之日限を定める二

こまるから、一寸一筆書て

帰るとか帰らぬとか返事ヲ



御頼申ます、外の事は

此頃杉君に合から都而

聞つもりだ、先今日は

用要之点迄で、早々頓首、

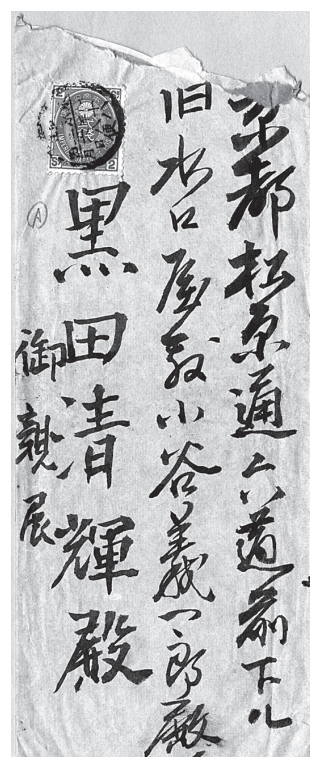
六月十八日

山本芳翠

黒田老兄

足下

封筒（縦二・一 cm、横八・一 cm）
（表）



京都松原通六道前下ル

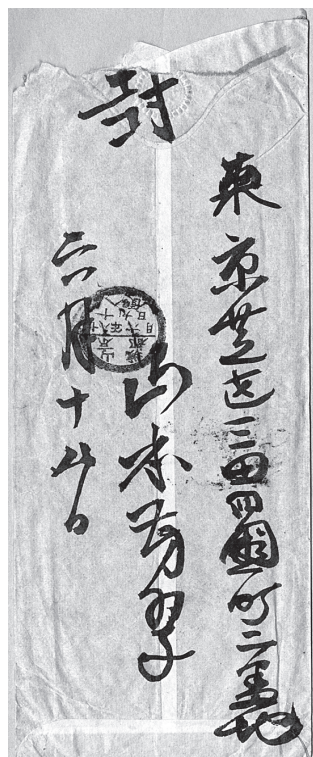
旧水口屋敷小谷義一郎殿方

黒田清輝殿

御親展

（消印） 武蔵東京三田廿八年六月十八日八便

（裏）



東京芝区三田四國町二番地

封 山本芳翠

六月十八日

（消印） 山城京都廿八年六月十九日八便

明治二十八年六月二十一日付書簡(〇八一〇三四)

(縦一八・〇cm、横八二・〇cm)

君は怒るか何だか手紙
返事を少ししてくれぬ
おこるも人にしやぐられて
をこつてわいけないよ
君は僕におこるような事ハ
しないつもりだが、何か心持が
わるい事が有ならそれハ
夫レであた時ニしかり賜へ、それハ
そうして杉君が僕之内へ
来てくれましたが僕はまだ
行かぬ、画は三枚ばかり出来た

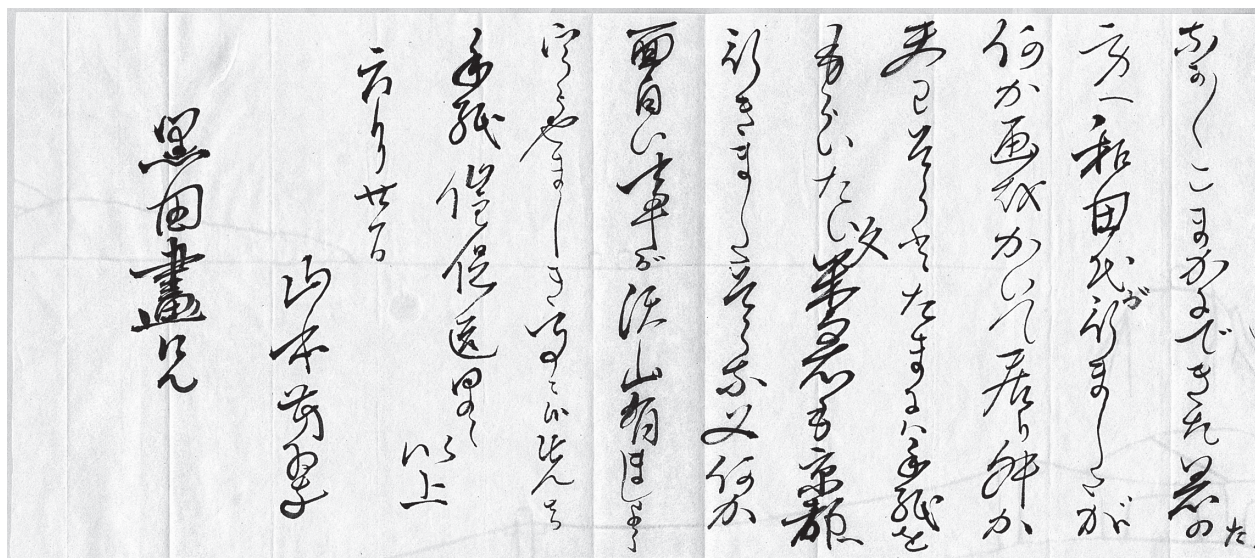
7. 黒田清輝宛山本芳翠書簡(明治二十八年六月二十一日)

本書簡の冒頭では、黒田からの返信が無いことについて苦言を呈し、返事を催促している。前便から三日後であり、おそらくそれ以前より黒田からの返事が滞っていたことが類推できる。たとえば黒田に宛てた五月二十六日付の杉竹二郎書簡では、具体的な内容は不明であるものの、黒田の宇治での仕事について言及している⁽¹⁾。あるいは六月二十八日付の書簡に「君之方は又上等で須磨や明石之浦風に吹かれて」とあることから、この頃黒田は京都から離れ、須磨や明石に行っていた可能性も考えられる。いずれにせよ、黒田からの返事がなかなか来ないことに、芳翠は年長者として黒田を諭している様子がうかがえる。

その他にも杉が芳翠のもとを訪れたことや、「画が三枚ばかり出来たなか／＼こまかにできた」など、近況を報告している。また「君の方へ和田氏が行きましたが何か画をかって居り歟か」とあり、当時京都に滞在していた和田英作について気を配る様子がうかがえる。同じく「久米君も京都へ行きましたそうな」とあるように、久米は京都の黒田に宛てた明治二十八年六月十日の書簡で京都に行く旨を伝えている⁽²⁾。

(1) 「黒田清輝宛杉竹二郎書簡(明治二十八年五月二十六日)」『黒田清輝フランス語資料集』東京文化財研究所、二〇一〇年三月。

(2) 「黒田清輝宛久米桂一郎書簡(明治二十八年六月十日)」同右。



なか／＼こまかにできた、君の

方へ和田氏が行ましたが

何か画をかいて居り舛か、

夫わそうとたまにハ手紙を

もらいたい、久米君も京都へ

行きましたそうな、又何か

面白い事が沢山有ましょう、

うらやましき事二候、先は

手紙催促迄、早々
以上、

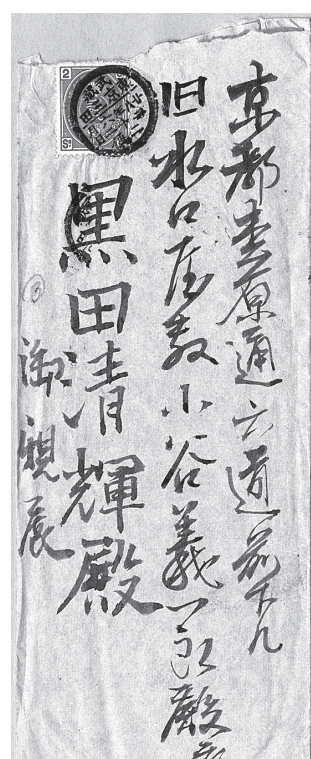
六月廿一日

山本芳翠

黒田書兄

封筒（縦二・一 cm、横八・二 cm）

（表）



京都松原通六道前下ル

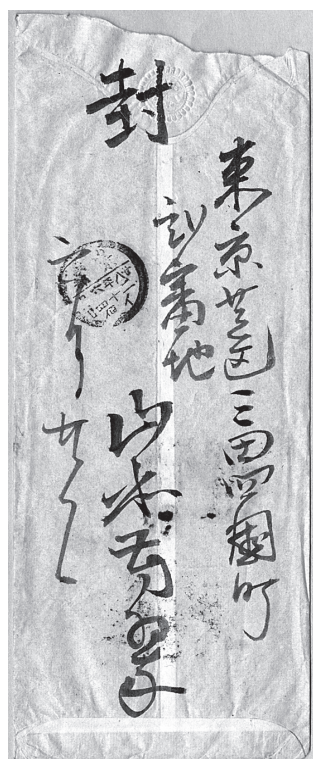
旧水口屋敷小谷義一郎殿方

黒田清輝殿

御親展

（消印）武蔵東京三田／廿八年六月二十二日二便

（裏）



東京芝区三田四國町

貳番地

封 山本芳翠

六月廿一日

（消印）山城京都／廿八年六月二十四日イ便

明治二十八年六月二十八日付書簡(〇八一〇二四)

(縦一八・〇cm、横一九一・〇cm)

此頃君之所え返事
を催促之手紙を出す
行きちかいに君之返事が
来て面目玉をころかしたが
遠くて見へなかつた、君之
ゆうように金もうけが有れハ
すてきだが例之宮内省ダ
からなか／＼心配な事だて其
内には君も帰るだろふから
成たけうまく頼みます、夫
から堀井と越知とが大
骨をりて廿五日之六時から

此頃は君之所え返事

を催促之手紙を出す

行きちかいに君之返事が

来て面目玉をころかしたが

遠くて見へなかつた、君之

ゆうように金もうけが有れハ

すてきだが例之宮内省ダ

からなか／＼心配な事だて其

内には君も帰るだろふから

成たけうまく頼みます、夫

から堀井と越知とが大

骨をりて廿五日之六時から

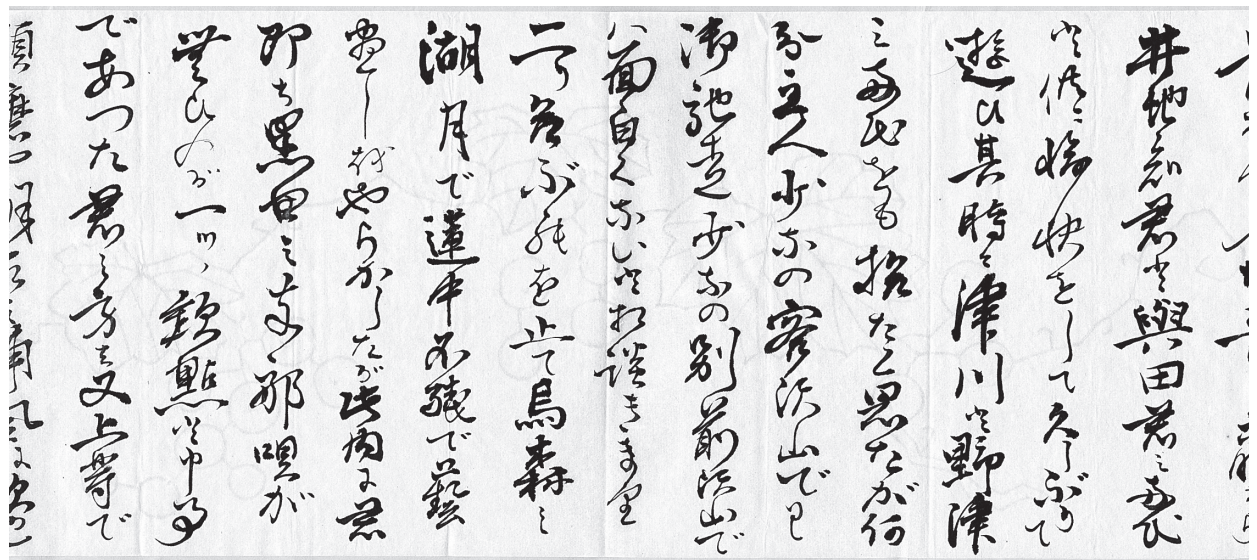
8. 黒田清輝宛山本芳翠書簡(明治二十八年六月二十八日)

本書簡は六月十八日付の書簡で計画された遊楽会の様子を伝える。従軍でお世話になった人へのお礼として読売新聞の越智と時事新報の堀井が企画したこの遊楽会は、六月二十五日の午後六時より「烏森の湖月」で開催された。「烏森の湖月」は当時新橋にあった有名な料亭で、明治五(一八七二)年に銀座の料亭・花月楼の支店として開店し、日清戦争に戦役した軍人たちが、終戦後によく集まった場所として知られる。

さてこの会には企画者である堀井と越智に加え「伊地知」「奥田」という人物が参加し、他にも、「津川」や「野津」という人物も招待する予定であったと書簡は伝えている。伊地知、奥田、津川、野津は文脈からして日清戦争の軍の関係者と思われるが、大阪朝日新聞の特派員である天野鐵腕が著した「入清日記」では「参謀部第二課依田大尉、野津大尉、管理部津川大尉皆我輩新聞記者を遇する頗る惻篤にして」とあるように、おそらく従軍した新聞記者や画家たちの世話役としてこの三名が関わっていたことがうかがえる。よって書簡に登場する奥田、津川、野津はこの三名を指す可能性が考えられよう。いずれにせよ「黒田之支那唄が無ひのが一ツノ缺點と申事であつた」と記しているように黒田は欠席であった。

前便の書簡で芳翠は黒田に返事を催促しているが、冒頭では催促の書簡と入れ違いで黒田の書簡が届いたことが記されている。その中で「君之ゆうように金もうけが有れハすてきだが例之宮内省ダからなか／＼心配な事だて其内には君も帰るだろふから成たけうまく頼みます」と宮内省関係の仕事について触れていることは注目される。黒田を介した仕事の斡旋なのか、具体的に何を指しているのかは不明であるものの、芳翠が帰国後に宮内省の仕事に多く携わっていたことは留意する必要があるだろう。

その他、来月出かけること、杉に青山であったこと、病気から快復



井地知君と與田君之両氏

と供ニ愉快をして久しぶりて

遊び、其時二津川と野津

之両氏をも招たく思たが、何

分主人少なの客沢山でわ

御馳走少なの別前沢山で

ハ面白くないと相談きまり、

二り召ぶのを止て烏森の

湖月で蓮中不残で藝

盡しをやらかしたが、此内に君

即ち黒田之支那唄が

無ひのが一ツノ缺點と申事

であつた、君之方は又上等で

したこと、合田の兄、すなわちフランス公使館勤務の田島応真が帰朝したと、そして日清戦争の戦地から帰ってきた黒田の鉄砲や軍服などの扱いについて尋ねている。

「僕も来月は出かけます」とあるが、これは明治二十八年七月三日付、芳翠の弟・山本金吾に宛てた書簡に、父が病気で薬を見つけること、そして実家に帰る際に持参することが記されていることから、帰郷することを指している可能性が考えられる。父・山本権八は八月十五日に亡くなり、芳翠は三十年ぶりに故郷へ帰っている。

(1) 天野鐵腕『入清日記』『大阪朝日新聞』一八九四年十一月八日。また黒田の従軍日記のうち明治二十七年十二月六日にも「今日管理部にて野津鎮武氏に逢う」(『黒田清輝日記』第二巻、一九六七年二月)とあることから、「野津」は野津鎮武を指すと考えられる。また「伊地知」は伊地知参謀こと伊地知幸介か。

(2) 「山本金吾宛山本芳翠書簡(明治二十八年七月三日)」『画集・山本芳翠の世界』郷土出版社、一九九一年。

須磨や明石之浦風に吹かれ
ておはげが黒くなりとも
少しかやきのしやれだが定
めて面白かつたであります
僕も山方海方が好きだが
時々海を見ないと心ろが
せまくなるようだ、久米ハ
いくら塩風に吹かれても
下染がいゝから目に立ツき
づかいハない、山海之空氣を
のミ、うまい物を沢山喰ひ
込ミ、非常につよく成ても
一件は樽附たしすべて
うらやましい事だ、僕も

須磨や明石之浦風に吹かれ
ておはげが黒くなりとも、
少しかやきのしやれだが定
めて面白かつたであります、
僕も山方海方が好きだが
時々海を見ないと心ろが
せまくなるようだ、久米ハ
いくら塩風に吹かれても
下染がいゝから目に立ツき
づかいハない、山海之空氣を
のミ、うまい物を沢山喰ひ
込ミ、非常につよく成ても
一件は樽附たしすべて
うらやましい事だ、僕も

来月は出かけます、此頃
杉に青山で合た、僕も病氣
で酒をやめて居たが、醫者が子
あんまりいいので吞ませ無
から、いま／＼しいから此頃ハ
毎ばん栗盛を五合位ひ
吞で勇氣を出し薬を
やめたら病氣かなをつた、
まだ少しせきが出る、合田は
兄きが帰て来たから外へ
でなくして居ます、君の戦
地から持て来た鉄砲とチャンノ
きもの力鎧冑などハ君の
留守江持て行こふか僕の
ところにあづかつて置くか

来月は出かけます、此頃

杉に青山で合た、僕も病氣

で酒をやめて居たが、醫者がね、

あんまりいいこじに吞ませ無い

から、いま／＼しいから此頃ハ

毎ばん栗盛を五合位ひ

吞で勇氣を出し薬を

やめたら病氣かなをつた、

まだ少しせきが出る、合田は

兄きが帰て来たから外へ

でなくして居ます、君の戦

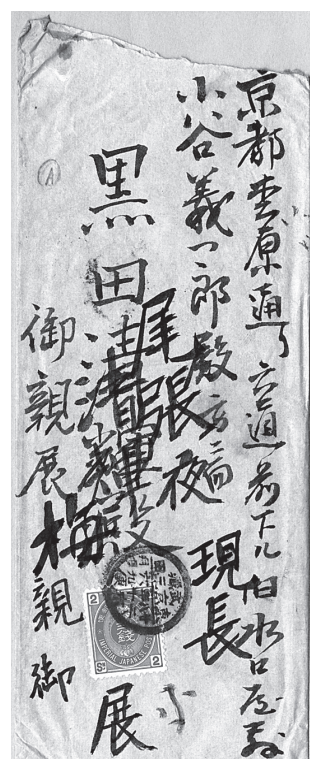
地から持て来た鉄砲とチャンノ

きもの力鎧冑などハ君の

留守江持て行こふか僕の

ところにあづかつて置くか

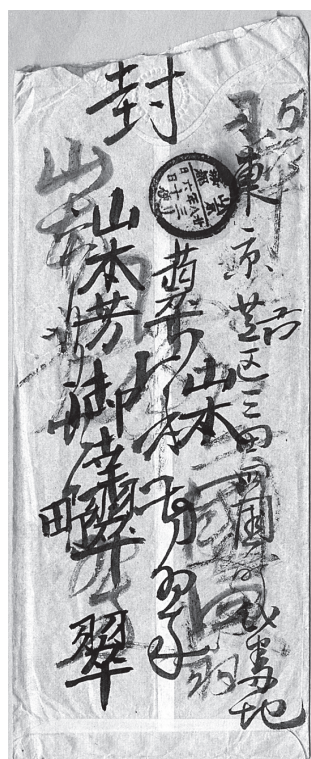
封筒(縦二・一cm×横八・一cm)
(表)



京都松原通り六道前下ル旧水口屋敷
小谷義一郎殿方二而
黒田清輝殿
御親展

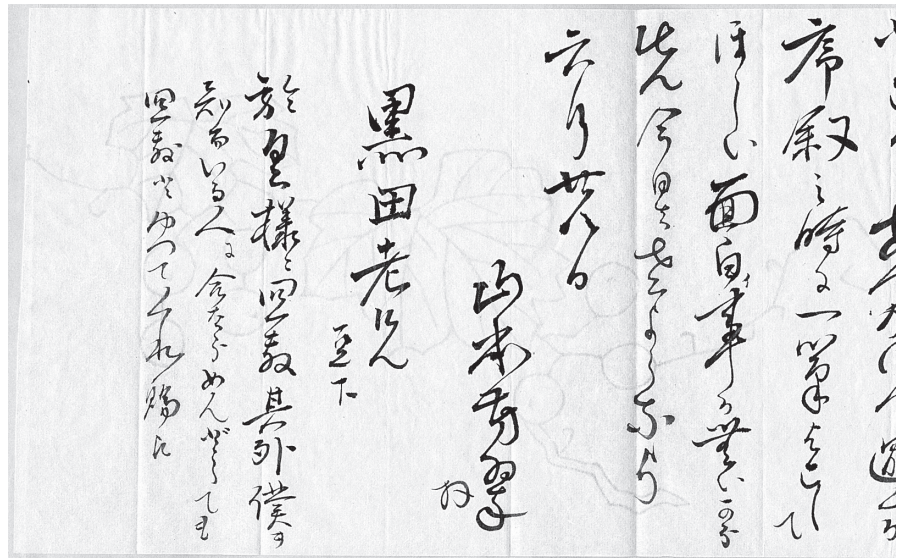
(消印) 武蔵東京三田廿八年六月二十九日郵便

(裏)



東京芝区三田四国町式番地
山本芳翠
封

(消印) 山城京都廿八年六月三十日郵便



席叙之時に一筆よこして

ほしい、面白イ事か無いから

先今日はさようなら、

六月廿八日

山本芳翠

拝

黒田老兄

足下

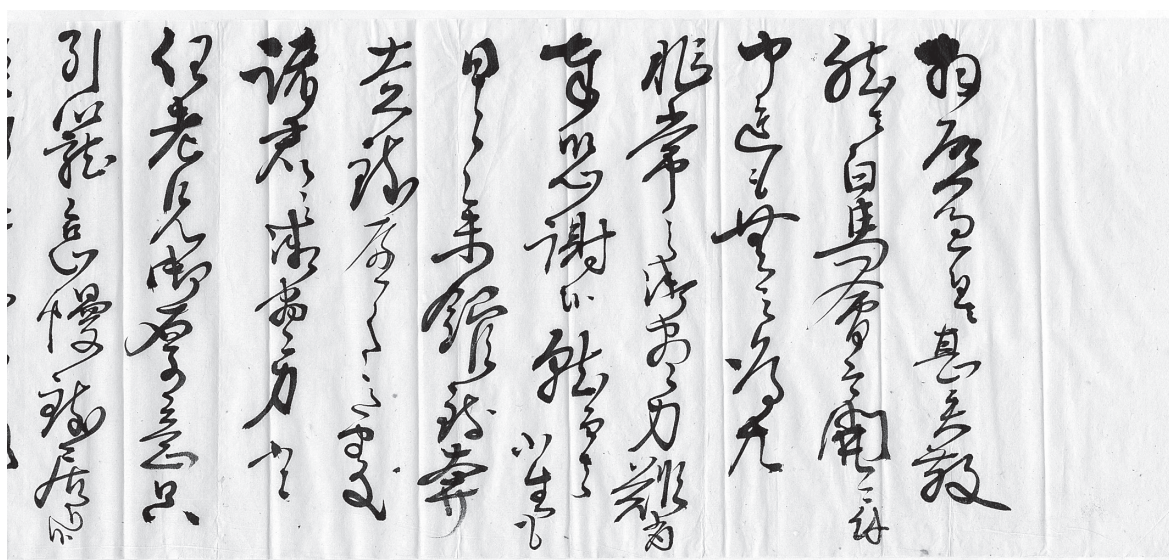
をく様に宜敷、其外僕ヲ

知っている人に会なら、めんどうても

宜敷とゆつてくれ賜江、

明治三十五年九月二日付書簡（二二―一五六）

（縦一八・二cm、横七八・九cm）



拝啓、過日は甚失敬、

然は白馬會々開二付

申迄も無之候得共、

非常之御盡力難有

奉恐謝候、然而は小生も

日々来館致奔

走致べき之處、

諸君之御盡力と

任老兄御厚意、只

引籠怠慢致居り候

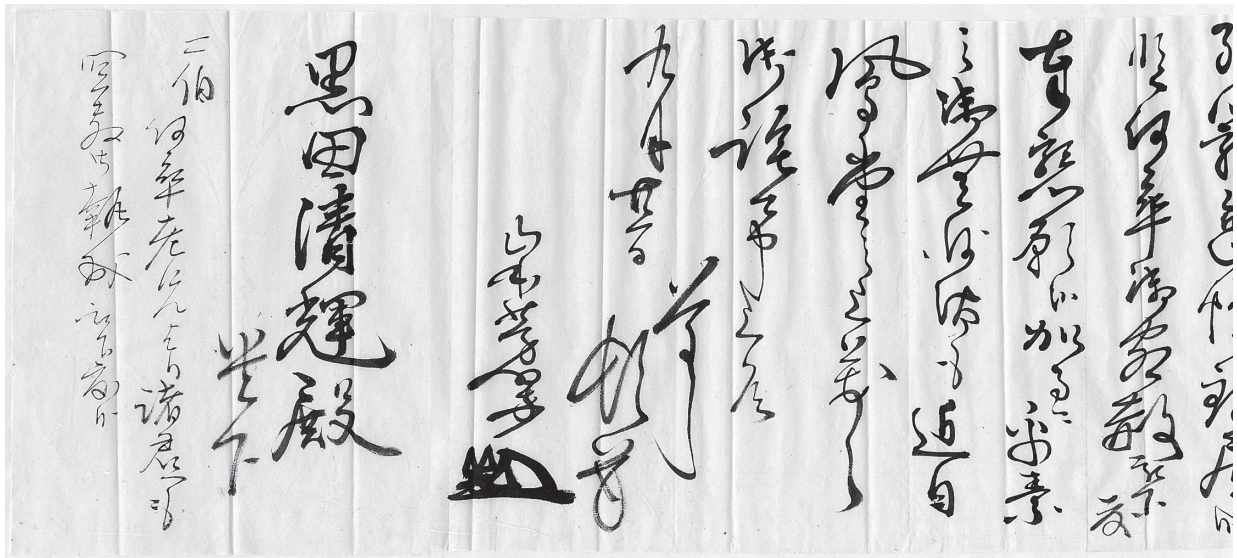
9. 黒田清輝宛山本芳翠書簡（明治三十五年九月二日）

本書簡では明治三十五（一九〇二）年、第七回白馬会開催準備のお礼とお詫びを伝える。この年は芳翠の経歴において空白の期間にあたり、本書簡で「引籠怠慢致居り候」と記されているように、あまり表立つ活動は見られない。そして翌年の明治三十六（一九〇三）年からは、活人画や舞台背景の制作に傾倒するようになる。

さて文中では白馬会の開催に黒田が尽力したことについてのお礼、そして本来ならば芳翠も参加すべきことについてお詫びが記されている。この年の九月二十日から十月二十九日まで上野公園第五号館で第七回白馬会が開催され、芳翠は伊藤博文の肖像画を出品しているが、本書簡からは芳翠が白馬会の運営や展覧会の準備など、実務には関わっていないことが知られる。芳翠は第一回展の開催に際して多くの出品を黒田と約束するが、実際には第一回展に「旅順、金州、朝鮮等戦争画」⁽²⁾を出品し、以降明治三十六年開催の第八回展と明治三十八（一九〇五）年開催、白馬会創立十年記念絵画展覧会に出品が確認できる程度である。この二回はいずれも新作ではなく、第八回展は模写参考品として渡欧期に描かれた「天女」が出品され、また第十回展では合田清によって肖像画が出品されている。芳翠は前述のとおり白馬会の立ち上げ時には関わっていないながらも、実際には出品に対して消極的な姿勢がうかがえる。

（1）『美術新報』第一卷第一五号、一九〇二年十月二十日。

（2）『報知新聞』一八九六年十月六日。



段、何卒御容赦被下度

奉懇願候、加る二平素

之御無沙汰も近日

鳳堂之上萬々

御詫可申上候、

草々

九月廿一日

頓首、

山本芳翠(花押)

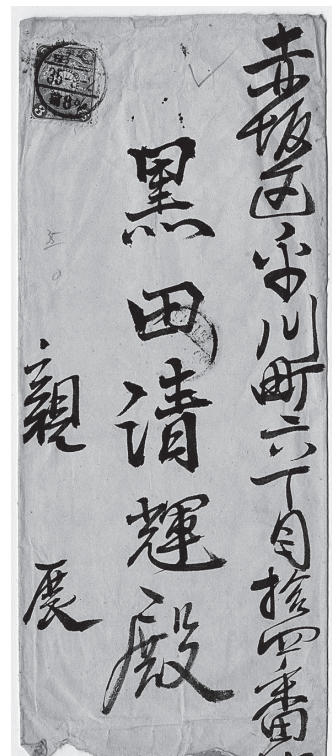
黒田清輝殿

貴下

二伯、何卒老兄より諸君へも

宜敷御執成被下度候、

封筒(縦二・八cm×横九・四cm)
(表)



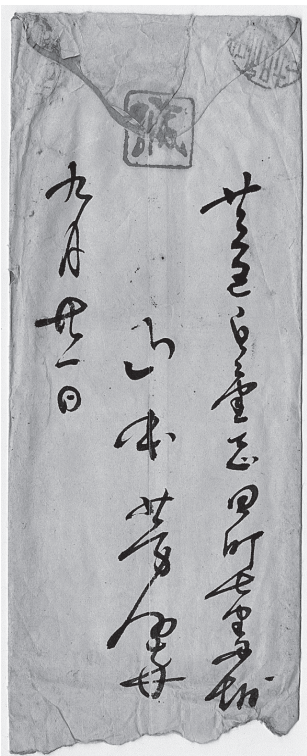
赤坂区平川町六丁目拾四番地

黒田清輝殿

親展

(消印) 東京三田 35・9・21

(裏)



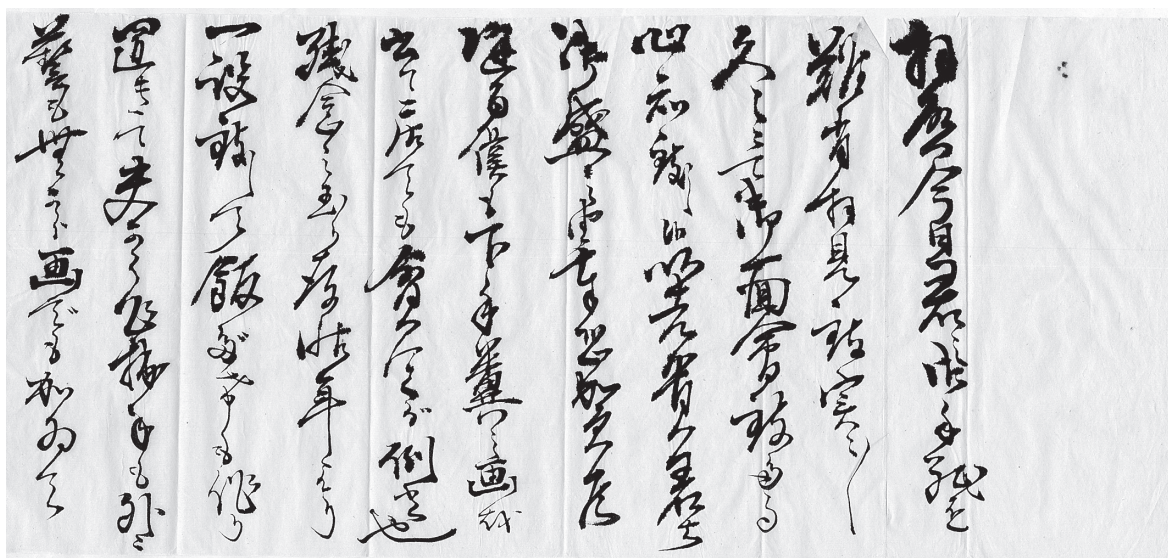
芝区白金志田町七番地

(緘) 山本芳翠

九月廿一日

年欠十一月九日付書簡（二六―〇五二）

（縦一八・〇cm、横一三〇・三cm）



拝啓、今日君之御手紙を

難有拝見致、実二く

久々にて御面會致たる

心知致し候、以先貴君は

御盛之由奉恐賀候、

降而僕も下手糞之画を

書て居ても貧乏が例と也、

残念之至り存、昨年より

一設致して飯だけでも作り

置きて、夫から乍拙手も外二

藝も無から画でもかゝて

10 黒田清輝宛山本芳翠書簡（年欠十一月九日）

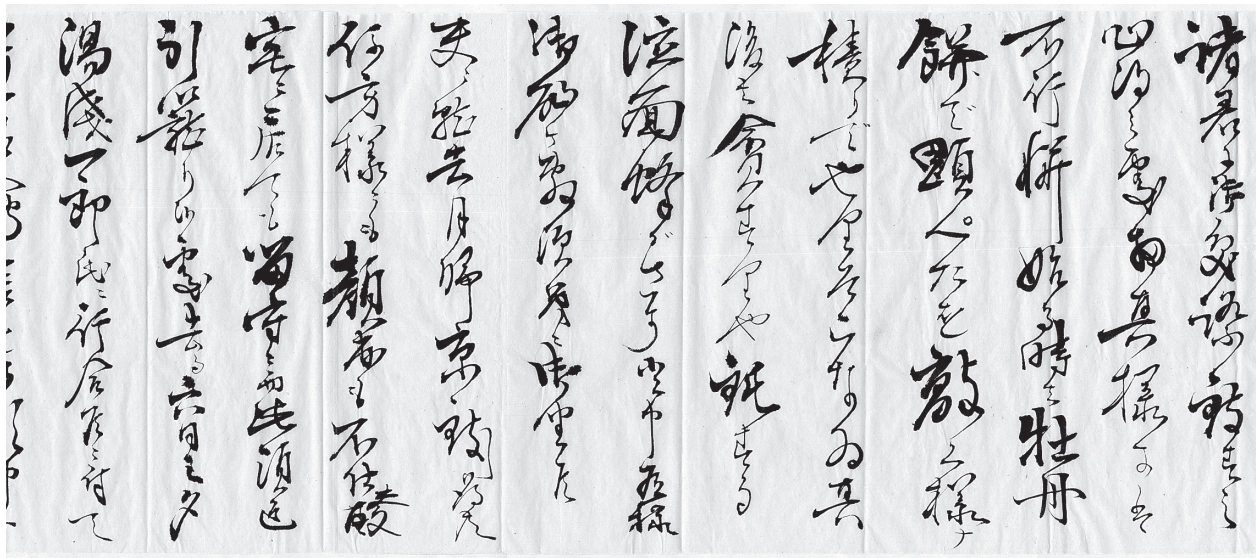
年期不明の書簡であるが、芳翠の住居が「芝区白金志田町七番地」に転居していることから、明治二十八年十一月以降の書簡と考えられる⁽¹⁾。書簡では金銭的に苦勞していることが記され、「貧すりや鈍する泣面蜂がさす」などその文面からは悲壯感が漂う。

冒頭で黒田からの手紙が届いたことが記され、「実二く久々にて御面會致たる心知致し候」と書いてあることから、この書簡が書かれた時期に芳翠と黒田は疎遠になっていたことがうかがえる。また芳翠は去る月、すなわち十月に何処からか帰京したことに付いて言及しているが、その後に「何分長く之間留守を致し置候」と記してあることから、長期にわたり東京から離れていたことが知られる。文中末尾には「此頃二又々静岡迄参り雜事相方付帰京之上は」と記していることから、芳翠が静岡に行つていた可能性も考えられるが、芳翠と静岡を結び付ける資料は乏しく、目的および時期は不明である⁽²⁾。

また六日の夕方には偶然湯浅一郎と出会い、黒田への伝言を頼んでいる。芳翠は黒田に面会を希望するものの、留守で不在の間に雑用が溜まったために、伺うことがかなわず、静岡の用事が片付き次第伺う旨が記されている。

(1) 『画集・山本芳翠の世界』で紹介された明治二十八年十一月二十八日付の山本金吾宛山本芳翠書簡では、既に住所が志田町宛になっている。

(2) 長尾一平は佐藤久二をめぐる回想の中で芳翠が「二階堂某」という華族と静岡を訪れ磯谷本家の利光と共に、国のために新しい特殊な金属を製造する計画について言及している（長尾一平編『山本芳翠』長尾一平、一九四〇年）。このほかにも芳翠は磯谷の本家と繋がりをもち、日清戦争のジオラマ画を描き、静岡市内で磯谷健吉の叔父が展示したと長尾は伝えている。よつて芳翠の静岡行はこの磯谷家と関係する可能性が想定される。



諸君に御笑語致す之

心得之處、扱其様には

不行濟、始る時は牡丹

餅で頬ぺたを敲く様ナ

積りでやりそこなる、其

後は貧すりや鈍する

泣面蜂がさすと申候様、

御恥ケ敷次第第二御座候、

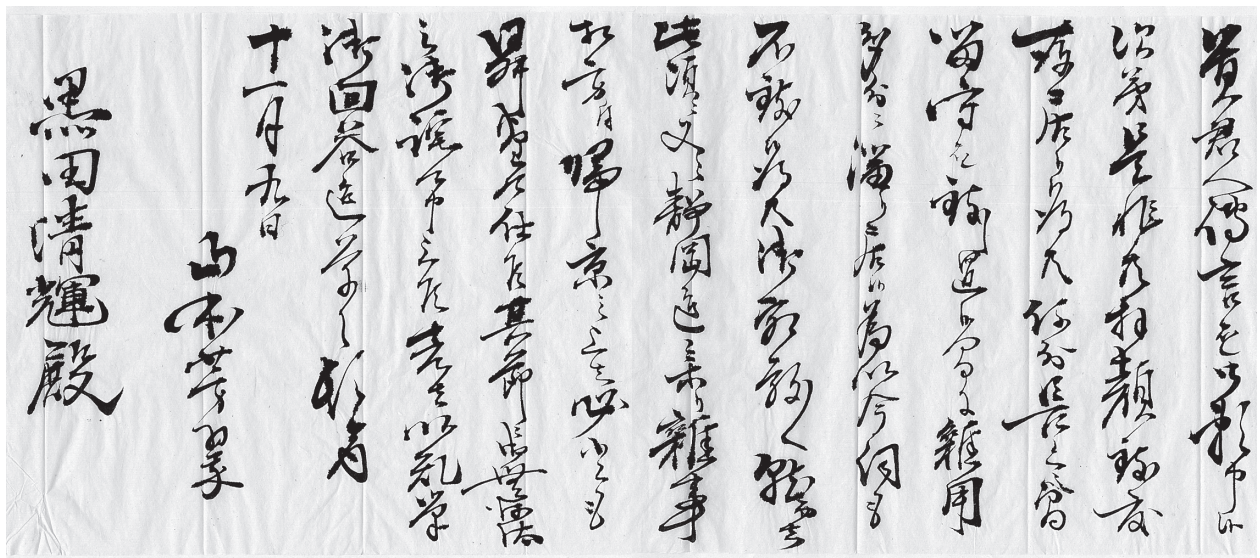
夫二就去月帰京致し候得共、

何方様二も顔出も不仕、夫故

宅二居ても留守二而此頃迄

引籠り候處、去る六日之夕

湯淺一郎氏二行合候二付て



貴君へ傳言を御頼申候

次第、是非共拝顔致度

存居り候得共、何分長く之間

留守を致し置候間に、雜用

多分二溜り居候為、以今伺も

不致候得共、御容赦く、就而は

此頃二又々静岡迄参り雜事

相方付帰京之上は、必とも

昇堂可仕候、其節二御無沙汰

之御詫可申上候、先は以乱筆

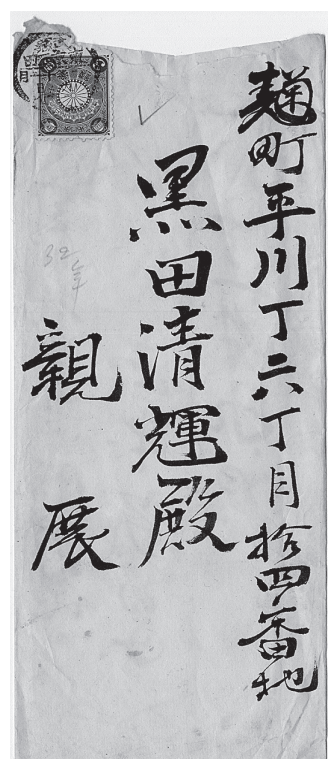
御回答迄、草々頓首、

十一月九日

山本芳翠

黒田清輝殿

封筒（縦二・三 cm × 横八・一 cm）
（表）



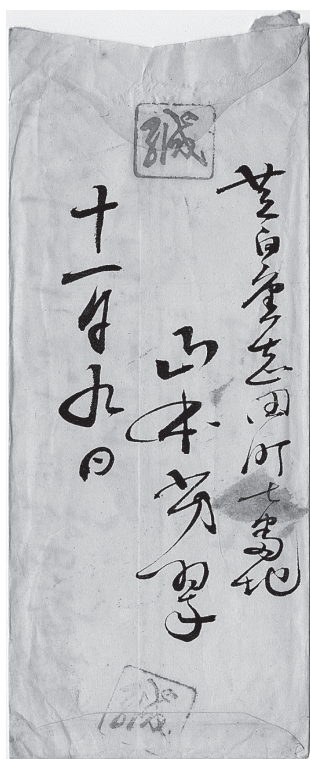
麹町平川丁六丁目拾四番地

黒田清輝殿

親展

（消印）武蔵東京三田□□年十一月九日

（裏）



芝白金志田町七番地

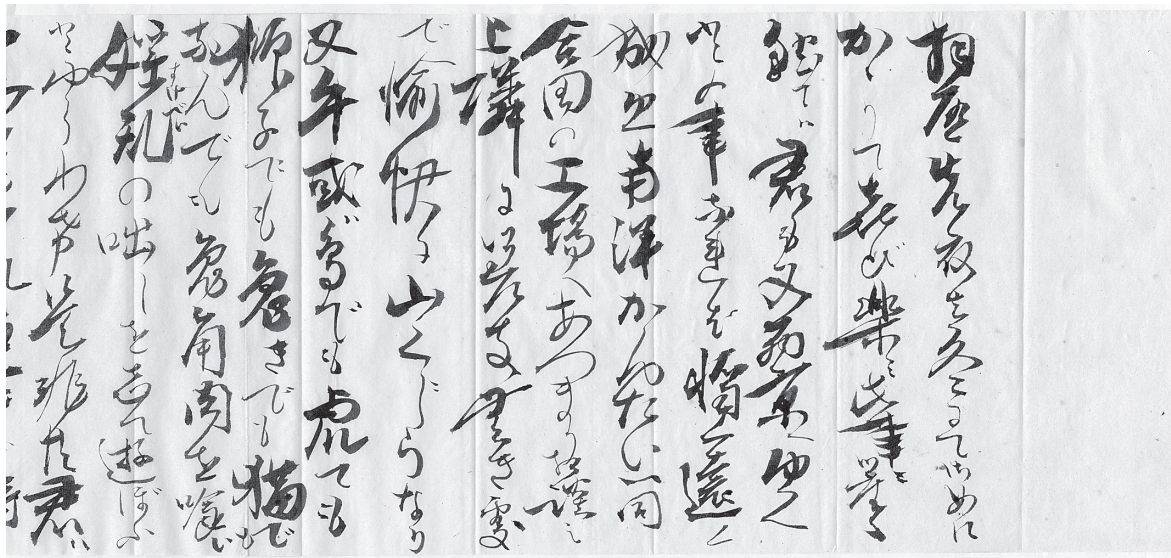
（緘）山本芳翠

（緘）

十一月九日

年欠十二月十五日付書簡(二一―一八八)

(縦一八・〇cm、横六五・六cm)



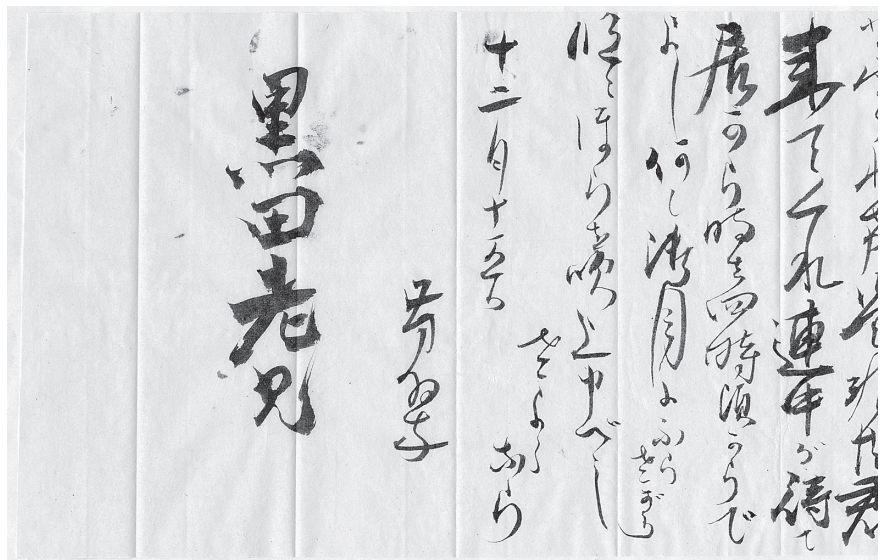
拝啓、先夜は久々にて御めに
 かゝりて喜び樂ミ此事ニ御座候、
 然てハ君も又西京へゆく
 との事なれば暫く遠く
 成ゆへ、南洋かんたい一同
 合田の工場へあつまり相談之
 上、隣に差支無き處
 で愉快に山くじらなり
 又午或ハ鳥でも虎ても
 獅子でも兎きでも猫でも
 なんでも兎角肉を喰い
 姪^{すけい}乱の咄しをして遊ぼふ、
 とゆうわけ是非共君ハ

11. 黒田清輝宛山本芳翠書簡(年欠十二月十五日)

封筒の切手と消印部分が切り取られているために年期不明の書簡。
 文中では「先夜は久々にて御めにかゝりて喜び樂ミ」とあり、本書簡
 の直前に直接会っていたことが知られる。また関西へ旅立つ黒田が東
 京を離れる前に合田の工場、すなわち赤坂区溜池町三番地に構えられ
 た生巧館の工場に「南洋かんたい一同」で集まり、何事かについて相
 談した上で遊びたい旨が記されている。「南洋かんたい」は不明であ
 るものの、洋画家あるいは洋行帰りの画家たちを指す言葉として考え
 られる。

黒田は明治二十八年十二月十六日に結婚する久米桂一郎の挙式に出
 席するため、十二月中旬頃に上京していたことが先行研究において指
 摘されているが、本書簡の日付が十二月十五日付であること、そして
 黒田が再度関西に戻るという内容から、書簡は明治二十八年の可能性
 が考えられる。

(1) 児島薫「黒田清輝、久米桂一郎宛 藤島武二書簡(二)」『美術研究』
 四一六号、二〇一五年一月



来てくれ、連中が待て

居から時は四時頃からで

よし、何も御目^カにふらさがり

段々ほらを吹上申べし、

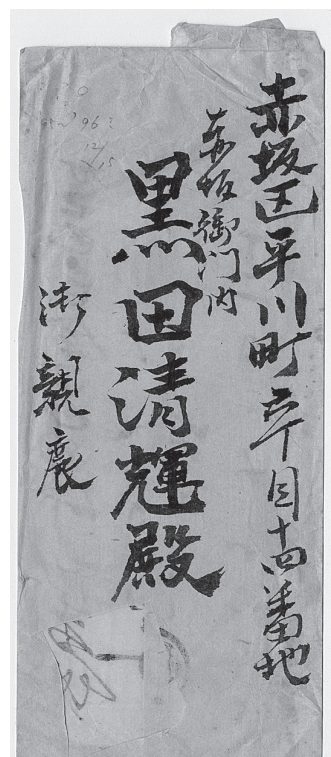
さようなら、

十二月十五日

芳翠

黒田老兄

封筒（縦二〇・八cm、横八・〇cm）
（表）



赤坂区平川町六丁目十四番地

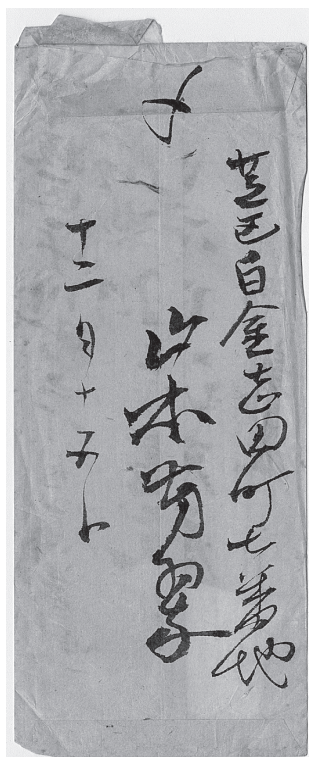
赤坂御門内

黒田清輝殿

御親展

※消印、切手切抜き痕あり

（裏）



芝区白金志田町七番地

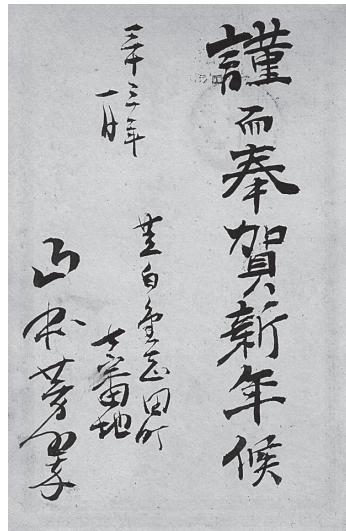
山本芳翠

十二月十五日

12 黒田清輝宛山本芳翠書簡（明治三十三年一月一日）（五三一・一二七）

（縦一三・九cm、横九・〇cm）

（裏）

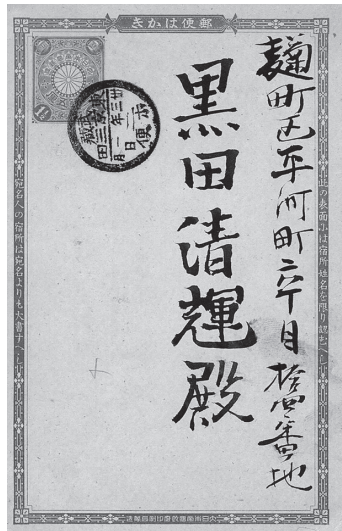


謹而奉賀新年候

三十三年 一月
芝白金志田町
七番地

山本芳翠

（表）



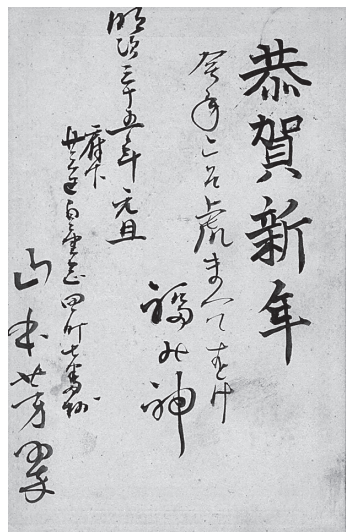
麹町区平河町六丁目拾四番地
黒田清輝殿

（消印） 武蔵 東京三田
三十三年一月二日未便

13 黒田清輝宛山本芳翠書簡（明治三十五年一月一日）（外一四）

（縦一四・一cm、横九・〇cm）

（裏）



恭賀新年

今年こそ虎まへてをけ

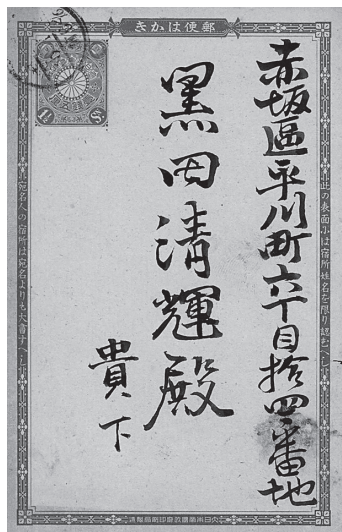
福の神

明治三十五年元旦

府下
芝区白金志田町七番地

山本芳翠

（表）



赤坂區平河町六丁目拾四番地
黒田清輝殿

貴下

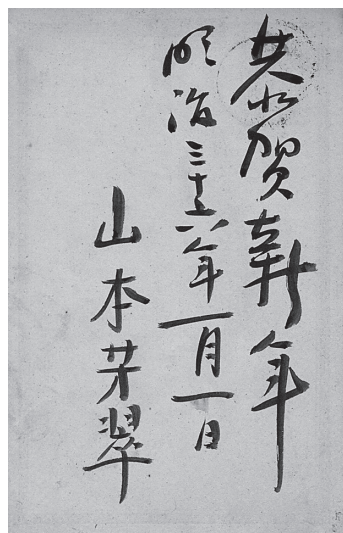
（消印） 判読不可

芳翠から黒田に送られた年賀状。明治三十五年の年賀状では、その年の干支である寅（虎）を使った言葉遊びが見られ、芳翠の洒落っ氣をうかがわせる。

14 黒田清輝宛山本芳翠書簡（明治三十六年一月五日）（外一五）

（縦一四・一cm、横九・〇cm）

（裏）

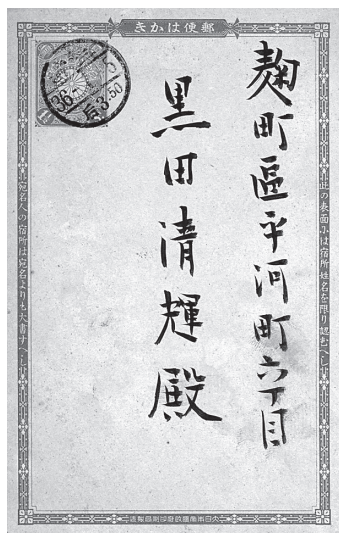


恭賀新年

明治三十六年一月一日

山本芳翠

（表）



麹町區平河町六丁目

黒田清輝殿

（消印）東京三田 36・1・5 后 3.50